

隈無(4)遺跡

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

1997年3月

青森県教育委員会



隈無(4)遺跡航空写真
(東から：奥に見える山は岩木山)



隈無(4)遺跡出土縄文早期貝殻文土器

序

津軽平野に位置する五所川原市には、觀音林遺跡や前田野目の須恵器窯跡をはじめ数多くの埋蔵文化財が包藏されております。青森県教育委員会では、国道101号浪岡五所川原道路（津軽自動車道）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を平成7年度から実施しております。

この度、平成7年度に発掘調査した五所川原市隈無(4)遺跡の報告書がまとまり、これを刊行することになりました。

調査の結果によると、縄文時代から平安時代までの各時代の遺物が出土し、長い時代にわたって人々が生活した遺跡であることが判明し、特に津軽平野では数少ない縄文時代早期の土器は注目されるものです。

この調査成果が広く文化財の保護と研究に活用され、また地域社会の歴史学習や地域住民の文化財保護の意識の高揚につながることを期待したいと存じます。

最後に、平素より埋蔵文化財の保護に対し御理解を賜っている建設省青森工事事務所並びに五所川原市教育委員会と、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり御指導、御協力を賜った関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

青森県教育委員会

教育長 松 森 永 祐

例　　言

- 1 本報告書は、平成7年度に実施した国道101号浪岡五所川原道路建設事業予定地内に所在する限無(4)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の遺跡番号は、05076番である。
- 3 本報告書の執筆者は、依頼原稿については文頭に記載し、その他は文末に付した。なお、周辺の地質および遺跡の土層の項は青森県埋蔵文化財調査センター総括主査伊藤昭雄が担当した。
- 4 掘図の縮尺は各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は不統一である。
- 5 資料の鑑定・分析及び試料の分析については次の方々に依頼した（順不同、敬称略）。

火山灰試料の蛍光X線分析 奈良教育大学教授 三辻 利一

炭化物の放射性炭素年代測定 学習院大学教授 木越 邦彦

- 6 本報告書に掲載した地形図（遺跡位置図）は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図（「浪岡」・「大沢廻」）を複写、接合したものである。

- 7 遺構・遺物の文中、図中、写真中の表現は、次の様式、基準に従った。
 - (1) 北の方位表示は全図とも座標北である。
 - (2) 遺構名は、調査時のものを用いたが、2基のみ変更した。変更した遺構名は次の通りである。（原図と遺物の注記には旧遺構名を用いている。）

第5号土坑（旧）→第3号土坑（新） 第7号土坑（旧）→第4号土坑（新）
 - (3) 遺構内外の堆積土の注記は、「新版標準土色図」（小山・竹原1967）を用いた。
 - (4) 遺構の平面図は、なるべく磁北が左上方向を指すように掲載した。よってセクションは、実測した面を反転させているものがある。
 - (5) 原則として遺物には、観察表を付し、出土地点や諸特徴を一覧できるようにした。
 - (6) 図中で使用したスクリーン・トーンの表示は、次のとおりである。



- (7) 陶磁器の年代は廃棄年代ではなく、およその焼造年代を記載してある。
- 8 引用・参考文献については、本文末に収めた。文中に引用した文献名については、著者名（編集機関）と西暦年で示した。
- 9 発掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 発掘調査及び本報告書の作成にあたり、次の諸氏から御協力・御助言を頂いた（順不同・敬称略）。

飯島伸一 井上雅孝 宇部則保 小笠原善範 小山彦逸 佐藤智雄 佐々木浩一 工藤清泰
越田賢一郎 鈴木信 鈴木徹 瀬川滋 仙庭伸久 田中寿明 富永勝也 豊田宏良 長尾正義
羽柴直人 半沢紀 福田友之 松谷純一 村木淳 森岡健治

目 次

口 絵	隈無(4)遺跡航空写真	
	隈無(4)遺跡出土縄文早期貝殻文土器	
序		
例 言		
第Ⅰ章	調査に至る経緯と調査要項	2
第1節	調査に至る経緯	2
第2節	調査要項	2
第Ⅱ章	調査の方法と調査の経過	3
第1節	調査の方法	3
第2節	調査の経過	5
第Ⅲ章	遺跡周辺の地形と地質	6
第1節	地理的位置と周辺の地形	6
第2節	周辺の地質及び遺跡の土層	9
第Ⅳ章	検出遺構と出土遺物	13
第1節	土坑及び土坑内出土遺物	13
第2節	溝 跡	15
第3節	遺構外出土遺物	16
1 土 器		16
2 土 製 品		28
3 石器・石製品		28
4 陶 磁 器		30
5 金 屬 製 品		30
第Ⅴ章	調査の成果	31
第1節	遺構について	31
第2節	遺物について	31
第VI章	自然科学的分析	33
第1節	火山灰の蛍光X線分析	33
第2節	放射性炭素年代測定	35
第VII章	調査のまとめ	36
◇写真図版		37
◇報告書抄録		45

図版目次

図1 遺跡の位置	1
図2 遺跡の地形図・グリッド配置図・遺構配置図	4
図3 五所川原市七和地域の地形分類図	7
図4 浪岡町吉野田周辺の地形の詳細分類図	8
図5 隈無(4)遺跡付近の地層推定断面図	8
図6 隈無(4)遺跡北東1kmの露頭のスケッチ	8
図7 隈無(4)遺跡内土層実測図	11
図8 土坑および土坑内出土遺物	14
図9 溝跡	15
図10 第I群第1類土器出土状況	19
図11 土器1	20
図12 土器2	22
図13 土器3	23
図14 土器4	24
図15 土器5	25
図16 土器重量分布図	27
図17 土製品	28
図18 石器・石製品	29
図19 陶磁器・金属製品	30
図20 K-Ca分布図	34
図21 Rb-Sr分布図	34
図22 Fe因子の対応	34

写真図版目次

写真1 遺跡周辺航空写真	37
写真2 調査開始時状況・遺物出土状況・基本層序・第1号土坑	38
写真3 第2号土坑・第3号土坑・第4号土坑	39
写真4 第1号溝跡	40
写真5 貝殻文土器出土状態・大型焼土・貝殻文土器	41
写真6 土器	42
写真7 土器	43
写真8 石器・石製品・陶磁器・金属製品	44



図1 遺跡の位置（スクリーントーン部分：本図は建設省国土地理院発行の25,000分の1地形図「浪岡」・「大沢遊」を複製したものである）

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯

国道101号浪岡五所川原道路は、南津軽郡浪岡町から五所川原市までの全長15.7kmを結ぶ自動車専用道路で、津軽自動車道の一部を形成するものである。平成3年度に青森県の事業として着手され、平成5年度からは建設省の事業となっている。

青森県教育庁文化課では、平成3年度に津軽自動車道建設事業と文化財保護の調整を図るために分布調査を実施した（『青森県遺跡詳細分布調査報告書IV』青森県埋蔵文化財報告書第146集）。

限無(4)遺跡はその際に新たに確認された遺跡で、青森県遺跡番号は05076で、縄文時代と平安時代の遺跡とされた。

平成7年度に限無(4)遺跡の発掘調査を青森県埋蔵文化財調査センターが実施することになり、平成7年4月24日から調査を開始した。
 (木村鐵次郎)

第2節 調査要項

1 調査目的	国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する限無(4)遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に資する。	
2 発掘調査期間	平成7年4月24日（月）から同年11月2日（木）まで	
3 遺跡名及び所在地	限無(4)遺跡（青森県遺跡番号05-076）五所川原市人字羽野木沢字限無55-33、外	
4 調査対象面積	10,000平方メートル	
5 調査委託者	建設省東北地方建設局青森工事事務所	
6 調査受託者	青森県教育委員会	
7 調査担当機関	青森県埋蔵文化財調査センター	
8 調査協力機関	五所川原市教育委員会、西北教育事務所	
9 調査員等	調査指導員 村越 潔 青森大学教授（考古学） 調査協力員 釜范 裕 五所川原市教育委員会教育長 調査員 佐藤 仁 弘前市文化財審議委員（歴史学） 高島 成侑 八戸工業大学教授（建築学） 赤平 智尚 青森県立柏木農業高等学校教諭（考古学）	
調査担当者	調査担当者 青森県埋蔵文化財調査センター 調査第一課 副参事兼調査第一課事務取扱 北林八洲晴 主 事 木村 高 " 坂本 真弓 調査補助員 吉田 晴明、竹内 隆行 本多 顯子、斎藤 昭子	

第Ⅱ章 調査の方法と調査の経過

第1節 調査の方法

1 グリッドの設定（図2中段）

調査区域内におけるグリッド設定にあたって、先ず道路建設用幅杭No.252を基準点（G-270）と定め、No.252とNo.254を結ぶほぼ北西-南東方向の基準線をGライン、Gラインの中心杭No.252部分と直交する北東-南西方向の基準線を270ラインとして座標軸を設定した。

1グリッドの規模は4m×4mに設定し、各グリッドには北西-南東方向では南東から北西へ1・2・3……と算用数字を、北東-南西方向では南西から北東へA・B・C・……とアルファベットを付し、グリッドの呼称は南隅の交点を使用することにした（アルファベットのPは付さなかった）。

さらに4m×4mの1グリッドの中には16個の1m×1m小グリッドを設け、1～16の番号を付した（グリッド配置図左上）。なお、北西-南東方向のグリッドの基準線は、座標北から西に50度ずれている。

2 遺物包含層の調査方法

発掘調査に当たっては、各地区ごとに適宜、遺跡に堆積する土壤の層位的な堆積状況を観察するために数本のセクションベルトを設け、各グリッドごとに掘り進めていった。

基本土層の名称は、表土から下位にローマ数字を付すことにした。土層観察にあたっては『標準土色帖』を用い注記した。

出土した遺物の取上げは、グリッド単位（小グリッド単位）・層単位に行い、必要に応じて写真を撮影した後に平面図を作成し、標高を測定、さらに番号を付すこととした。

3 遺構の調査方法

遺構の調査は、原則的に四分法で行い、堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めたが、遺構の規模や形態から四分法が困難になった場合は二分法に切り替えて行うこととした。

土層の名称は、基本的に上位から下位に、左から右に算用数字を各自付すこととした。土層観察にあたっては『標準土色帖』を用い注記した。

堆積する土壤の中に火山灰を含む場合は、火山灰の純度の高い土壤を中心に露呈させ、サンプリングした。

4 実測図の作成

遺構の形態及び遺構内出土遺物の出土地点や出土状態については、全て遣り方測量によって行った。縮尺は20分の1を基本とするが、種類や規模の大小により10分の1、40分の1、その他とした。

5 遺構番号の命名

遺構の番号は、その遺構の種類に応じて確認順に付すよう努めたが、本遺跡の場合は風倒木痕が多く、中でも小型のものは土坑と類似した状況で確認されるたあ、黒褐色調の土壤が確認された時点での遺構番号を付して、調査することとした。そのため欠番が生じた。よって本報告では一部に新番号を付している（例言参照）。

6 写真撮影

土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に撮影した。

フィルムはモノクロ・カラーリバーサル・カラーネガの3種を使用した。

(木村 高)

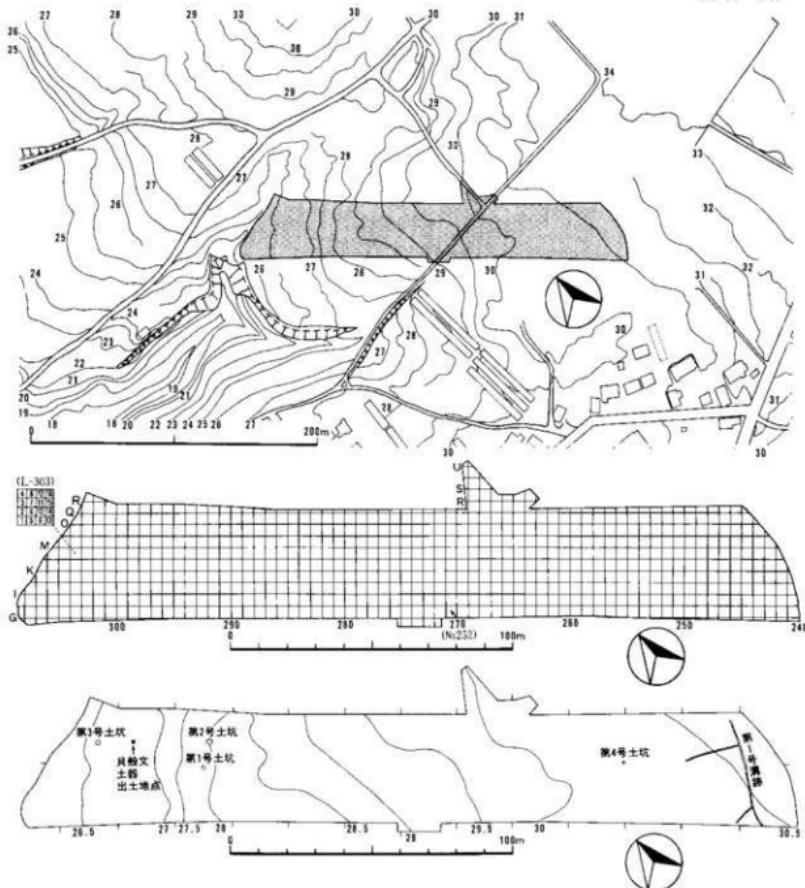


図2 遺跡の地形図・グリッド配置図・遺構配置図

第2節 調査の経過

平成8年4月18日に発掘作業員の雇用説明会を実施。調査開始日には、発掘調査機材を搬入し、ブレハブ内清掃、調査区内に散在する危険物の除去等の環境整備を行った。

調査開始日～4月末日 環境整備が終了した後、任意の地点に試掘箇所を適宜設け、調査区全体の層序及び土量、遺構・遺物の埋蔵量の把握に努めた。

5月 遺物の分布範囲は徐々に明らかとなり、特に293ラインより北西に遺物の分布が濃厚であると判明してきた。遺物は縄文土器片を中心に、縄文時代の石器や近世陶磁器片等も出土した。この時点で縄文早期の貝殻文土器も1片出土した。また、グリッドラインに沿って1m幅の基本土層観察用ベルトを20m毎に残しながら第I層の掘り下げを中心に行い、遺構確認を本格的に進めた結果、土坑を1基確認、精査を開始した。さらに、調査区北西端部に設置したトレーンチにより、近年になって埋められた大規模な沢の存在も判明した。

5月23日には発掘調査打合せ会議を浪岡町中央公民館において開催し、会議終了後、現地において境界杭や排水場所等について調査委託者と協議した。

6月 遺物の分布が極端に希薄であると判断された地区においては遺構確認を主目的とした重機による掘削を開始した。また、旧沢の無擾乱層における遺構・遺物の存在を確実に把握するため、手掘りによる掘削も継続した。風倒木痕内からの遺物は決して少なくはないため、風倒木痕は全て掘ることにした。

7月 調査区の南東に溝跡が検出されたが、遺構確認面の乾燥が著しく、散水を行いながらの作業となった。この時点で土坑は総数4基を数えた。

8月 最終確認面まで掘り下げる作業を中心進めた。特に縄文早期の貝殻文土器の出土層は第III層が中心であったため、第III層の掘り下げに専念した。

9月 調査区全体の精査がほぼ終了に近づいたため、14日からは隈無(4)遺跡の北西に位置する隈無(2)遺跡の調査区南東域3,200m²の遺構確認を行うことが決定した。隈無(2)遺跡では竪穴住居跡1軒と溝跡1条が検出された。

10月～調査終了日 隈無(2)遺跡の3,200m²内から検出された全ての遺構の完掘と隈無(2)遺跡の北西部3,400m²の試掘も行うことが決定した。新たに土器埋設遺構も検出されるなど、調査は急ピッチで進めなければならなくなってしまった。最終日は、みぞれの吹きつける悪天候に見舞われたものの、隈無(4)遺跡、隈無(2)遺跡あわせて13,200m²の全作業工程を終了した。

(木村 高)

第Ⅲ章 遺跡周辺の地形と地質

第1節 地理的位置と周辺の地形

限無(4)遺跡は、標高が26~31mの、全体的に西へ緩く傾く段丘面上にある。北西半、南東半の勾配は、それぞれ、17~120%、0~33%である。北西端には小規模な沢があり、1kmほど西には十川が北西へ流れている。本遺跡はもとはりんご畑であり、この辺一帯にはりんご畑が拡がっている。

本遺跡からは、北東に標高313mの鐘撞堂山、そのすぐ北には標高468mの梵珠山、北北東には標高549mの馬ノ神山を見る事ができる。津軽山地の分水嶺はこの後西寄りに北上していく。これらの西側には広大な津軽平野が拡がる。遺跡からは、北北西~西北西については、沢に杉林が生い茂っているため、平野を直接見ることはできない。西付近より岩木山の山体は始まり、西南に至って標高1,625mの山頂を見ることができる。西南から南にかけては、白神山地等県境の山々や、その手前に位置する、弘前市久渡寺山（標高663m）を見ることができる。東南東より南には八甲田山の峰々が連なる。東南~南300mほど向こうには、沢に杉林が生い茂っており、低い山々を見ることはできない。

水野・堀田（1983）は、本遺跡に係る5万分の1図幅「青森西部」地域において、津軽平野と大沢迦丘陵の間に分布する、海成段丘を中心とした砂礫台地を前田野目台地と呼び、標高・傾斜・開析状態・構成物等をもとに、GtⅠ面・GtⅡ面・GtⅢ面の3段に細分している。図3はその地形分類図である。GtⅠ面（上位面）は標高50~70mで、大沢迦丘陵の縁辺に分布し、表面は侵食により波状を呈する。GtⅡ面（中位面）は標高30~40m、地形面は平坦で、寺屋敷平・羽野木沢周辺で広く、開析谷には多くの溜池が見られる。GtⅢ面（下位面）は標高20~30mで、GtⅡ面の前面に断片的に分布する。本遺跡は、このうちGtⅡ面に位置する。

吾妻（1995）は、津軽半島に分布する地形面を、その分布形態と高度により、I面~V面の5段の段丘と沖積面に区分している。このうち、海成段丘は、高位よりI面・III面・V面の3段である。III面・V面は、それぞれ小貫はか（1963）の山田野段丘・出来島段丘に相当する。先のGtⅡ面・GtⅢ面は、本遺跡付近ではI面に相当する。図4は、本遺跡に係る浪岡町吉野田周辺の地形の詳細分類図である。なお、中川（1972）は、県下の段丘を、最高位、高位、中位、低位の4群に大別し、山田野段丘を中位段丘としている。山田野段丘は、岩木川と日本海岸に挟まれた地域および岩木川東岸に主に分布し、面はほぼ水平、高さは15~20mである。中位段丘は、下北では田名部段丘、県南東部では高館段丘で、県下の海岸地域に最も普遍的に分布し、古くは海岸平野であったとみられている。

吾妻（1995）は、I面について、砂・シルトを構成層とし、III面との間にはかの海成面がないことから、最終間氷期よりも1つ前の間氷期（約20~22万年前）に形成されたと考えるが、より古い可能性もあるとしている。最終間氷期は、欧州ではリス・ウルム間氷期、その1つ前はミンデル・リス間氷期と呼ばれている。

図4には、活断層である津軽山地西縁断層・大平断層および浪岡撓曲が示されている。何れも、太田・中田・宮内（1991）によって、空中写真をもとに、その存在が確実とされる。津軽山地西縁断層は、中里町役場付近から浪岡町銀へかけて断続的に延び、総延長は約30kmである。大平断層は、原子から浪岡町松枝にかけて断続的に延びる。津軽山地西縁断層は、北部・中部・南部に区分され、本遺

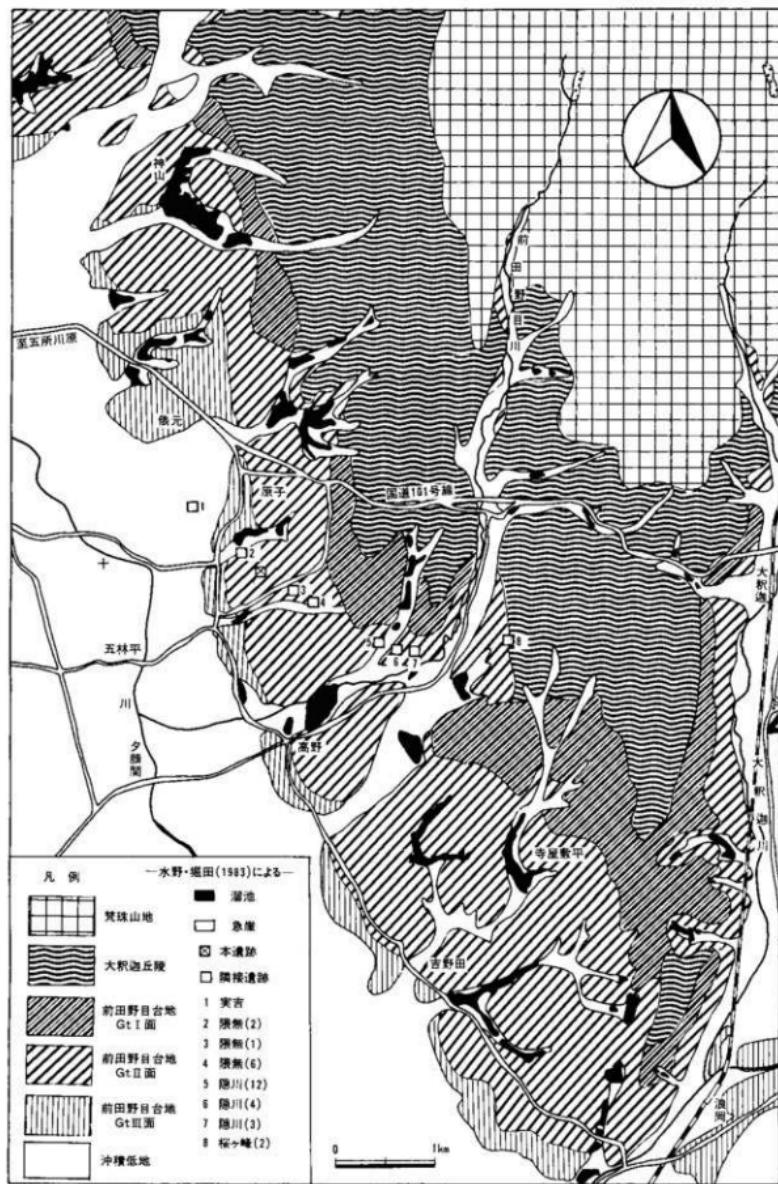


図3 五所川原市七和地域の地形分類図

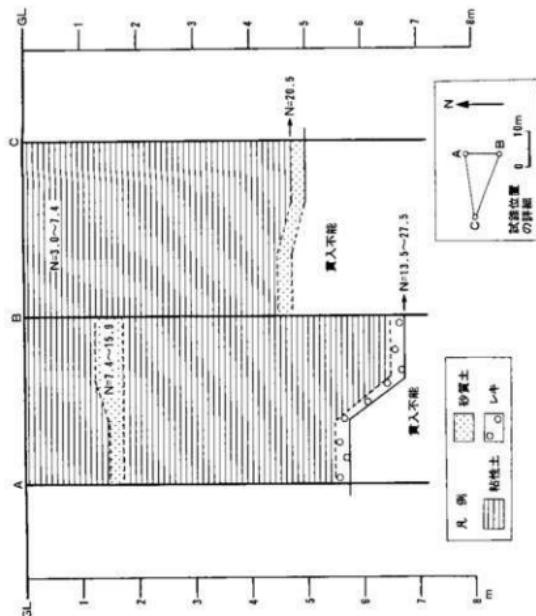


図 5 限無(4)遺跡付近の地層推定断面図



図 6 限無(4)遺跡北東 1 km の露頭のスケッチ

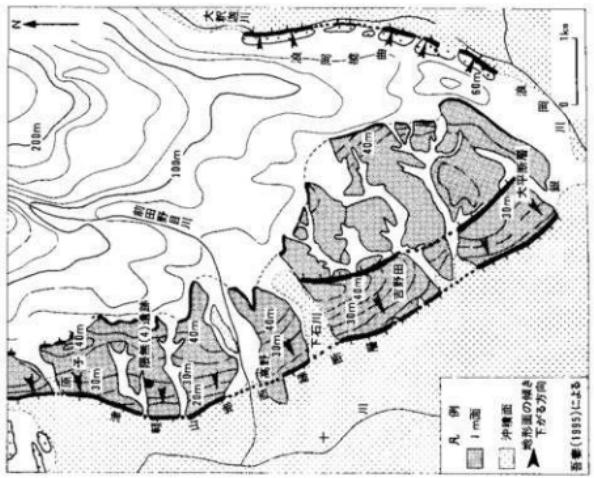


図 4 津岡町吉野田周辺の地形の詳細分類図

跡付近に係るものは南部である。地表における断層形態は、南部は「掩み」、大平断層は「逆向き低断層崖」としている。本遺跡、北西の隈無(2)遺跡、そして、さらに北西の沖積低地に位置する実吉遺跡の発掘調査では、断層・掩曲は検出されていない。津軽山地西縁断層は、本遺跡西側の沖積低地とGtⅢ面の境界付近に、およそ南北に延びているものとみられる。

第2節 周辺の地質及び遺跡の土層

本遺跡を含む津軽山地南部の地質構造は、馬ノ神山ドームに大きく影響されている。従って、堆積岩では馬ノ神山付近に見られる新第三系中新統の長根層が最も古く、ここから周囲へ離れるにつれ、順次新しい新生界が出現する。すなわち、中新統の馬ノ神山層・源八森層・不動の滝層・大滝沢層、鮮新統の大駿迎層・鶴ヶ坂層、そして更新統の前田野目層である。なお、馬ノ神山ドームの東半3分の1ほどは、津軽山地分水嶺のすぐ東側にあって、それとほぼ並行して延びる津軽断層によって切られており、ここでは中新統は最上部の大滝沢層に限られ、ほとんどは鮮新世以降の新しい地層が堆積している。岩佐(1962)によれば、津軽断層は、三厩湾より大駿迎に抜ける延長約50kmの衝状性逆断層で、その最大落差は津軽山地中央部付近で1,000mにも及ぶという。

本遺跡の基盤層は、分布が前田野目台地のそれと概ね重なる前田野目層である。本層の模式地は前田野目川下流一帯で、岩井(1965)によれば、模式地付近では鶴ヶ坂層を不整合におおい、灰色の浮石質砂岩、青灰色シルト岩および細円礫等からなり、最上部は黄褐色の浮石質火山灰および同色のローム質粘土よりなるという。シルト岩層中には泥炭の薄層(30~50cm)を2枚挟在している。全体的に津軽盆地の中心に向かって3度前後の傾斜をなしているが、最下部のものは局部的だが、10~5度傾斜しているのも見られるという。

本遺跡周辺に分布する、前田野目層以外の新生界の層相等は以下の通りである(岩井, 1965; 北村・岩井・多田, 1972; 岩井・沢田・大久保, 1983)。

沖積低地堆積物(泥・砂)……十川・浪岡川等によって供給された泥や砂で、津軽平野を構成する沖積統である。

沖積低地堆積物(砂・礫)……前田野目川・大駿迎川等、津軽山地の山間部を流れる小河川によって供給された砂や礫で、それら小河川沿いの谷底平野や前田野目台地周縁の津軽平野を構成する沖積統である。

段丘堆積物……細～中円礫で、前田野目台地のGtⅢ面を構成する洪積統である。

鶴ヶ坂層……中疊大の浮石を含んだ、淡灰色～紫灰色の浮石質～砂質凝灰岩である。全体的に塊状無層理で、主に火山碎屑流によって形成された鮮新統である。なお、村岡・高倉(1988)は、八甲田カルデラの形成に伴って噴出した2つの主な火碎流堆積物のうち、古い方を八甲田第1期とし、従来、鶴ヶ坂層と呼ばれた海底火碎流堆積物に対比し、その形成年代を、K-Ar法より65万年前の更新世としている。岩井(1965)も、本層からは化石が発見されず、時代決定は困難で、下位の大駿迎層と同じ構造運動に支配されることから、一応第三系として取扱っているにすぎない。

大駿迎層……主として中～粗粒砂岩からなり、細円礫岩およびシルト岩をしばしば挟在する。一般に下部はシルト岩が、上部では砂岩が優勢である。本層には軟体動物や有孔虫等の浅海性海棲動物化石が豊富に含まれ、大駿迎動物化石群として一般に知られている。鮮新統である。

大滝沢層……主として灰白色～白色の浮石質～砂質凝灰岩からなり、中新統である。

不動の滝層……主として、塊状～微層理を示す暗灰色珪藻土質シルト岩からなり、前田野目川流域では葉理を示す細粒砂岩の斑点を含む。全体的に貧化石帶となっているが、珪質海綿のサガリテスがほとんど全ての部分に含まれていることから、中新統である。サガリテスは日本の中新統上部、特に油田地域の泥岩中に多産する。

源八森層……板状層理を示す黒色頁岩からなり、下位の馬ノ神山層より漸移する。サガリテスを普遍的に含む

中新統である。

馬ノ神山層……主として、硬質頁岩・綿状頁岩からなり、層厚変化の著しい凝灰岩（太田凝灰岩部層）を挟む。この部層は、淡青緑色～白色ペントナイト質細粒～火山礫凝灰岩からなり、泥岩を挟む。サガリテスを中心とした中新統である。

長根層……馬ノ神山山頂一帯に分布し、淡緑色～灰褐色擬灰質砂岩・凝灰角礫岩からなる。流紋岩の熔岩を挟む在する中新統である。

前田野目層・鶴ヶ坂層及び大沢迦層は、国道101号沿い二ツ谷東方のメイブルビレッジ御北の露頭において、詳細に観察することができる。ここでは、大沢迦層がみかけ上西に30度前後傾斜しており、この上に塊状無層理を呈する鶴ヶ坂層が不整合に重なっている。鶴ヶ坂層の上には前田野目層がほぼ水平な層理を有して重なり、層厚は数メートルで、この上にローム層を載せている。

限無(4)遺跡における土層観察用として、K-299・0-257の各グリッドを一部深く掘った。観察した壁は、前者は北西壁、後者は北東壁である。この外にK-296・297グリッドについては、南西壁の土層8mを観察した。本遺跡における標準土層は、北西端に近いK-299グリッド北西壁を探った。

ここで土層の詳細は下の通りである。各グリッドの土層実測図は図7に示す。

I層	黒色土	7.5YR 2/1	ローム（径2~10mm）2%混入。しまりあり。粘性なし。
IIa層	黒褐色土	10YR 2/2	炭化物（径2mm）・ローム（径1mm）1%混入。しまりあり。粘性なし。
IIb層	黒色土	10YR 2/1	ローム（径1~2mm）2%混入。しまりあり。粘性なし。
III層	暗褐色土	7.5YR 3/3	ローム（径1~2mm）2%混入。しまりややあり。粘性なし。
IV層	明黄褐色ローム	10YR 6/6	しまりあり。粘性あり。色調は一様ではなく酸化部分は暗色。径5mm程度の浮石少量含む。ところによってリモナイトを多量含むも全体的には少ない。耕作土層とは漸移関係。
V層	明黄褐色ローム	10YR 6/8	最もしまりあり。粘性非常にあり。色調は一様ではなく粗粒部分は暗色。粘土部分は灰白色（10YR 7/1）でラミナを有しない。粗粒部分にリモナイトを多量に含む。量的にはIV層より多い。IV層とは明瞭な境界を有する。
VI層	灰黄褐色ローム	10YR 6/2	しまりあり。粘性ややあり。色調は一様ではなく、橙色ローム（7.5YR 6/8）が斑状に混入する。

吾妻（1995）は、I m面には、上より黄褐色軽石質火山灰・褐色ローム・暗褐色シルト質火山灰（以上上部火山灰）、洞爺火山灰（Toya）および下部火山灰の5層が模式的に載るとしている。このうち、津軽半島南部によく分布する黄褐色軽石質火山灰は、火山ガラスの屈折率から十和田八戸テフラ（To-HP）に対比される可能性が大きいという。To-HPは、いわゆる八戸火山灰であり、その降下年代は12000~13000年前である。また、上部火山灰と下部火山灰を区切る、白色で細粒のToyaは、北海道の洞爺湖を給源とする広域火山灰で、層厚は20cm前後である。町田・新井（1992）は、Toyaの噴出年代を10~13万年前としている。

本遺跡におけるIV層はTo-HPに対比される。V・VI層については、褐色ローム以下に対比されるが、詳細は不明である。図5は、本遺跡西南西約150mでの試錐に基づく地層推定断面図である。地表より4.5~6.5mまでは、N値が3.0~7.4の粘性土（一部7.4~15.9および20.5の砂質土）、それ以下は、砂礫である。この粘性土が下部火山灰層以上に当るとみられ、厚さは5m内外ということになる。砂礫層はいわゆる前田野目層とみられる。図6は、本遺跡北東1km強の国道101号線沿いに見られる露頭（標高約50m）のスケッチであるが、軟質のシルト岩～砂質シルト岩（前田野目層）はほぼ水平の葉理を有し、この上に不整合に黄褐色ロームが載る。このように、本遺跡地表下に見られる黄褐色ロームは、緩傾斜面では厚く堆積している。

（伊藤 昭雄）

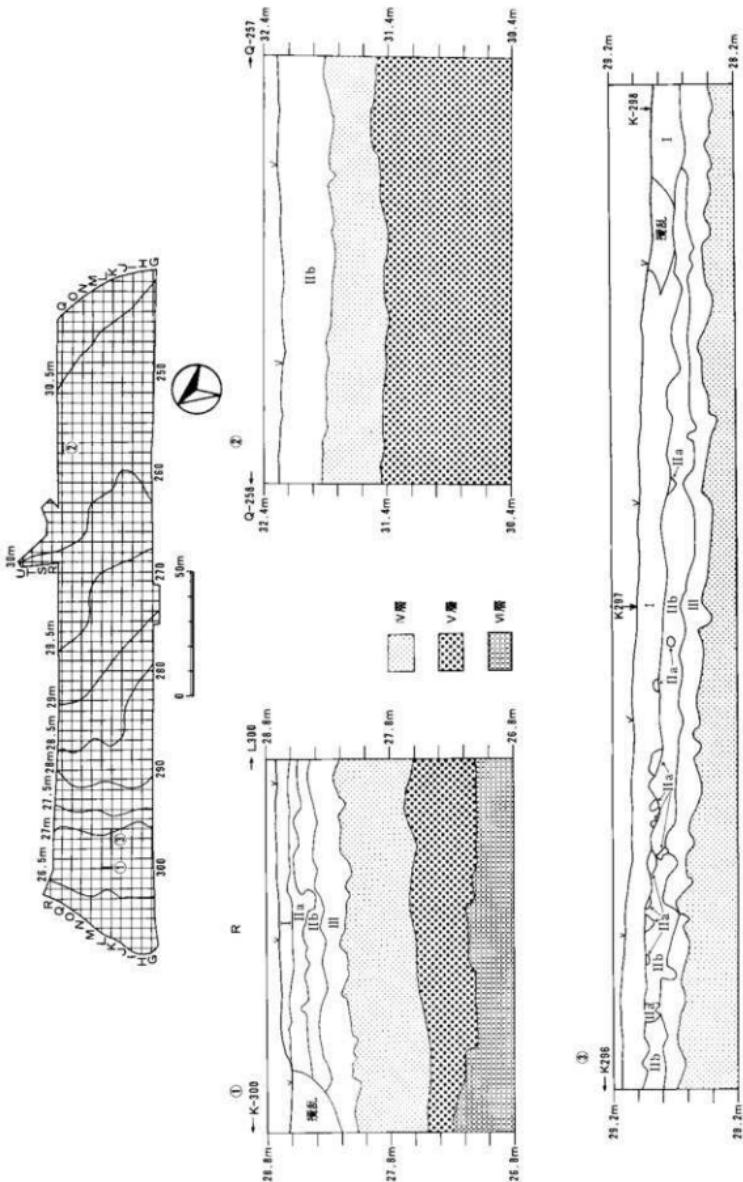


図 7 隅無(4)遺跡内土層実測図

引用・参考文献

- ・岩佐三郎 (1962) 青森県津軽地方の含油第三系とその構造発達史について。石油技術協会誌, 27, 197-231.
- ・小貫義男・三位秀夫・島田豊郎・竹内貞子・石田琢二・齋藤常正 (1963) 青森県津軽十三湖地域の沖積層。東北大地質古生物研報, 58, P. 1-36.
- ・岩井武彦 (1965) 青森県津軽盆地周辺に発達する新生界の地質学的並びに古生物学的研究。弘大教育学部紀要, 14, P. 85-155.
- ・北村 信・岩井武彦・多田元彦 (1972) 青森県の新第三系。青森県の地質, P. 5-70. 青森県。
- ・青森県農林部土地改良第一課 (1983) 土地分類基本調査「青森西部」。
- ・日本の地質「東北地方」編集委員会 (1989) 日本の地質2 東北地方、共立出版, 338p.
- ・須崎俊秋・箕浦幸治 (1992) 青森地域上部新生界の層序と古地理・地質学論集, 37, P. 25-37.
- ・中川久夫 (1972) 青森県の第四系。青森県の地質, P. 71-120. 青森県。
- ・梅津正論 (1976) 津軽平野の沖積世における地形発達史。地理学評論, 49, P. 714-735.
- ・村岡洋文・高倉伸一 (1988) 10万分の1八甲田地熱地域地質図説明書・特殊地質図(21-4), 地質調査所, 27p.
- ・箕浦幸治・中谷 周 (1990) 津軽十三湖及び周辺湖沼の成り立ち、地質学論集, 36, P. 71-87.
- ・活断層研究会 (1991) 新編日本の活断層—分布図と資料。東大出版会, 448p.
- ・寒川 旭 (1992) 地震考古学。中公新書, 251p.
- ・町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス—日本列島とその周辺。東大出版会, 210p.
- ・梅津正論 (1994) 沖積低地の古地理学。古今書院, 270p.
- ・吾妻 栄 (1995) 変動地形からみた津軽半島の地形発達史。第四紀研究, 34, P. 75-89.
- ・日本第四紀学会第四紀露頭集編集委員会 (1996) 第四紀露頭集—日本のテフラ。日本第四紀学会, 352p.

第IV章 検出遺構と出土遺物

遺構は総数で5基検出された。内訳は、土坑4基、溝跡1条である（図2：遺構配置図参照）。時期的には、土坑3基が白頭山苔小牧火山灰（B—T m）降下以前の構築で、ほぼ平安時代の所産と考えられる。また土坑1基と溝跡1条には、遺物や火山灰等の時期決定の要素が伴っていないため不明である。

遺構外からは、縄文時代の土器、石器、土製品、平安時代の土師器、須恵器、土製品、近世～近代の陶磁器、錢貨等が段ボール箱（34×42×21cm）にして16個分出土した。

土器は全て破片で、プライマリーな出土状態を示すものもほとんど見られなかつたが、唯一、縄文早期の貝殻文土器（図11）の破片の大半は第III層より出土した。

以下、遺構・遺物の順に述べる。

第1節 土坑及び土坑内出土遺物（図8）

4基検出した。位置関係は非常に散発的で、限定された範囲内にまとまるような傾向はうかがえないうが、1～3号の3基の土坑は291ラインより北西（標高28.0mより低位）に位置する。

以下、検出した4基について表形式で述べる。

*堆積上の分層は、大別層（A～）と細別層（I～）に区分した。＊規模の数値は上端を計測したものである。

（木村 高）

第1号土坑 （検出位置：K-292グリッド）

確認面	第III層上面	平面形	楕円形	壁	ほぼ直角に立ち上がる	底面	平坦
長 軸	145cm	短 軸	120cm	深さ	46cm	堆積上	18層に分層された。黒褐色土を主体とし、火山灰・炭化材を含む。D層（14～18層）は人為堆積、C層から上層は自然堆積と思われる。
出土遺物	堆積土-土器細片1点（時期不明）						
備考	壁面の3箇所が被熱し、焼土化している。出土した炭化材を生成する過程で生じたものと考えられる。						

第2号土坑 （検出位置：M-291,292グリッド）

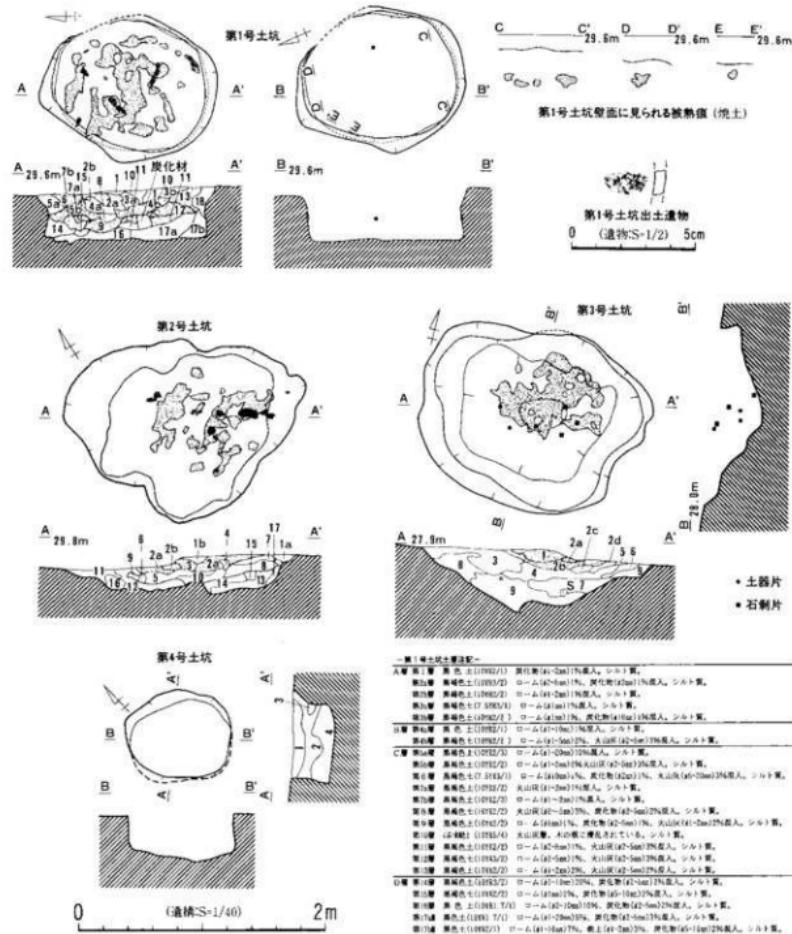
確認面	第IIb層上面	平面形	不整形	壁	曲線的に立ち上がる	底面	凹凸が見られる
長 軸	198cm	短 軸	149cm	深さ	27cm	堆積上	17層に分層された。黒色土を主体とし、火山灰・炭化材を含む。A層（1～4層）は自然堆積、以下の層の堆積過程は不明。
出土遺物	なし						
備考	第1号土坑と同様に炭化材が多く見られるが、被熱の痕跡や焼土等は見られない。						

第3号土坑 （検出位置：M-301グリッド）

確認面	第III層上面	平面形	不整楕円形	壁	曲線的に立ち上がる	底面	擂鉢状
長 軸	190cm	短 軸	147cm	深さ	52cm	堆積土	9層に分層された。黒褐色土を主体とし、火山灰・炭化物粒を混入する。A層（1～2層）は自然堆積、以下の層は人為堆積と思われる。
出土遺物	堆積土-土器片3点、自然礫の碎片3点（同一母岩）が出土したが、粉失した。						
備考	B層の第4層に炭化物粒が集中する。						

第4号土坑 （検出位置：L-255グリッド）

確認面	第IV層上面	平面形	楕円形	壁	ほぼ直角に立ち上がる	底面	ほぼ平坦
長 軸	87cm	短 軸	70 cm	深さ	37cm	堆積土	4層に分層された。黒色土を主体とし、ローム粒子を混入する。B層（4層）は人為堆積、A層は自然堆積と思われる。
出土遺物	なし						
備考	壁の一部がややフラスコ状に立ち上がる。						



第2号土坑土層記載	
大層	第1層 黄褐色土(0.00/2.0) 硫化物(4.0m)%, 黄褐色土(0.00/2.0)少入。
第2層	黄褐色土(0.00/2.0) 硫化物(4.0m)%, 大山河泥炭土(0.00/2.0)に混じて、Cに(5%程度)少入。
第3層	黑色 土(0.00/2.0) 硫化物(4.0m)%, 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第4層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第5層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第6層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第7層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第8層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第9層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第10層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第11層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第12層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第13層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第14層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第15層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第16層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。
第17層	黑色 土(0.00/2.0) 大山河泥炭土(0.00/2.0)少入。

第1号土坑土層記載	
大層	第1層 黑色 土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第2層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第3層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第4層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第5層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第6層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第7層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第8層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第9層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第10層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第11層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第12層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第13層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第14層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第15層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第16層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。
第17層	黒褐色土(0.00/2.0) ローム(4.0m)%, 黄褐色土(4.0m)%, 黑色土(4.0m)%, シルト質。

図8 土坑および土坑内出土遺物

第2節 溝 跡 (図9)

調査区の南東端に1条検出した。北北東～南南西に走り(a)、調査区域外に伸びる。また、2箇所において北西と西へ分岐する構造(b、c)を探るものである。以下、表型式で記載する。

(木村 高)

第1号溝跡

確認面	第IV層上面	長さ	a (39.5) m	b 20.2m	c (8.2) m	断面形	U字形～皿形
上端幅	a 33～65cm b 23～42cm	b 15～40cm c 3～27cm	c 25～35cm c 4～12cm		下端幅 a 8～25cm b 5～18cm c 10～25cm	傾 斜	方向は一定しない 図中矢印を参照
深 さ	a 23～42cm	b 3～27cm	c 4～12cm				堆積土 4層に分隔された。ローム粒を混入する。全層自然堆積と考えられる。
備 考	堆積土	水を流す溝ではなく、区画溝の可能性が高い。b、cの堆積土は卑層。					出土遺物 なし

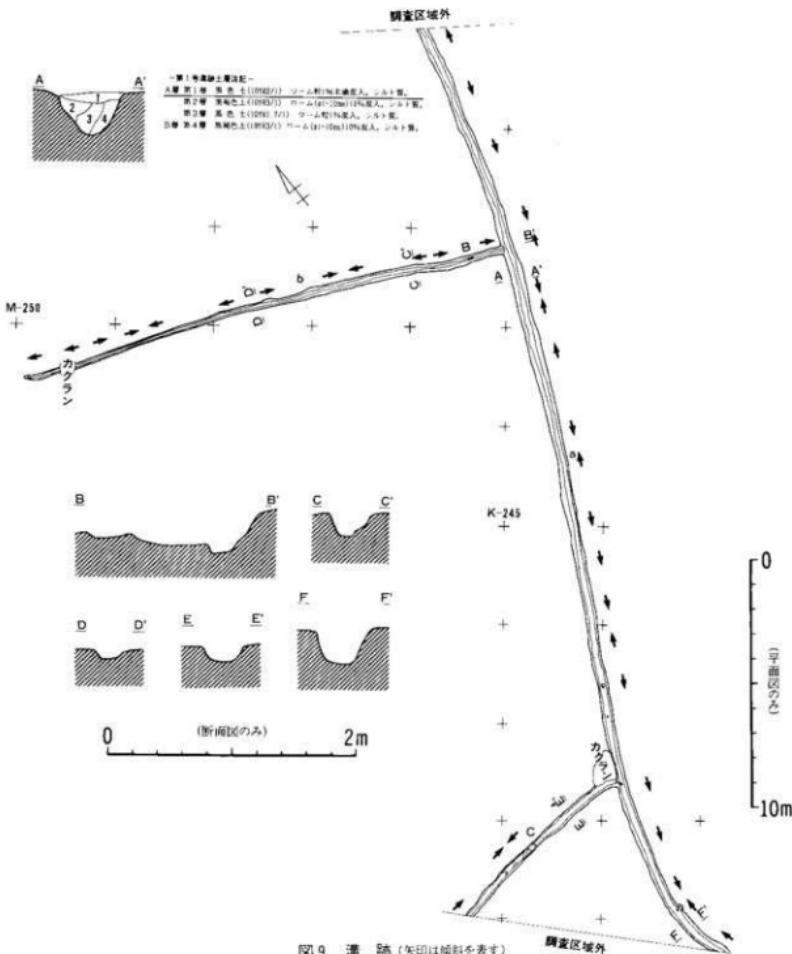


図9 溝 跡 (矢印は傾斜を表す)

第3節 遺構外出土遺物

1 土器 (図10～図16)

本遺跡での出土遺物は遺構外のものが大部分を占める。その中で、遺構外出土遺物の割合からいくと土器の出土が最も多い。その大部分が縄文時代の深鉢形土器で詳細な時期は不明である。縄文時代早期中葉から平安時代にかけての土器が出土した。出土層位と土器型式の関係については、第Ⅱ層から縄文時代前期後葉～平安時代の土器が出土し、第Ⅲ層から縄文時代中期中葉の貝殻文土器が出土した。出土している土器の重量分布を図16に示した。また以下の分類に従って土器を掲載した。

第I群 縄文時代早期に比定される土器

第1類 物見台式に比定される土器

第2類 ムシリ式に相当する土器

第II群 縄文時代前期に比定される土器

第1類 円筒下層d式に比定される土器

第2類 円筒下層式に相当する土器

第III群 縄文時代中期に比定される土器

第1類 円筒上層a式に比定される土器

第2類 円筒上層b式に比定される土器

第3類 円筒上層d式に相当する土器

第4類 円筒上層e式に比定される土器

第5類 楊林式に比定される土器

第6類 最花式に相当する土器

第IV群 縄文時代後期に比定される土器

第1類 後期初頭に相当する土器

第2類 十腰内I式に比定される土器

*第I群第1類土器については後述する。なお、「彌」：カクランー乱、直倒木直→直と表した。「海綿骨針」：肉眼で観察した海綿骨針を表記した。

土器の概要

第I群土器 (図12-1)

縄文時代早期の土器である。1と同一個体と思われる破片が数点出土している。先端が細い棒状工具のようなもので浅く施している。焼成は堅緻である。

第II群土器 (図12-2～16)

縄文時代前期の土器である。円筒下層d式 (図12-2～10) に相当する土器が大部分を占める。色調は黒褐色～黒色が多い。この中でもd₁式相当の土器 (図12-2～4)、d₂式相当のもの (図12-5～10) に分かれる。d₁式には口縁部が内湾気味で文様帶が比較的狭いといった特徴を持つものを当てはめ、d₂式は口縁部が外傾し文様帶が広くなるものの、隆帯上部に撚糸圧痕を施したものとした。また、同一個体と思われる土器が数片あり、口縁部資料も多く残存状態が良い。

第3類 後期中葉から後葉に相当する土器

第4類 後期に相当する土器 (底部)

第5類 中期末～後期に相当する土器

5 a類 口縁が内傾する土器 (最花式相当)

5 b類 折り返し口縁の土器

5 c類 口縁が外反する土器

5 d類 口縁が内湾気味の土器

5 e類 上記以外の5類土器

第V群 縄文時代晩期に比定される土器

第1類 大洞B式に比定される土器

第2類 大洞C₁式に比定される土器

第3類 大洞C₂式に比定される土器

第4類 大洞A式に比定される土器

第5類 晩期の粗製土器に相当する土器

第VI群 平安時代に比定される土器

第III群土器（図12-17～28、図13-29）

縄文時代中期の土器である。円筒上層a式（図12-17・18）、円筒上層b式（図12-19～21）、円筒上層d式（図12-22～24）、円筒上層e式（図12-25・26）、櫻林式（図12-27・28）、最花式（図13-29）と考えられる土器が出土した。22は粘土紐の状態から円筒上層c式の土器とも考えられるが、24に見られる粘土紐と形状が似ていたため円筒上層d式に含めた。29は器形から本類に含めたが、さらに時期が下る可能性もある。

第IV群土器（図13-30～51、図14-52～74）

縄文時代後期の土器である。縄文に沈線文を施すもの（図13-30～35）は後期初頭の沖附(2)式に極めて近いと思われる。十腰内I式（図13-36～44）はさらに細かい分類が出来ると考えられ、沈線文のみのもの（図13-36・37）、磨消縄文と縄文のもの（図13-41～44）、に分けられる。第4類の底部を扱ったもの（図13-49～51）は底部外面に現れる網代痕が見られることから後期のものとした。また、沈線を施した胴部片（45～47）は後期中葉以降のものと考えられる。第5類は縄文中期末から後期にかけての土器を扱った。主に口縁部ごとの特徴で分類したが、必ずしも時期差を表すものではない。第5a類は前後の土器型式にも類例があるため、若干時期の変動が考えられる。

第V群土器（図14-75～85、図15-81・86～89）

縄文時代晩期の土器である。晩期の土器は、調査区西側の沢近くで出土することが多い。大洞B式（図14-75）、大洞C₁式（図14-76）、大洞C₂式（図15-86～88）、大洞A式（図14-80・81、図15-81）などに分けられる。粗製土器は時期が特定できるものはこれと別にした。本類は地文にL R縄文・ハケメ状工具による条痕文・棒状工具による条痕文を施し、口縁部に浅い沈線文をつける。78は沈線の代わりに3条の撲糸圧痕を施した土器で、北海道中央地域で縄文時代晩期に出土例が見られる。本遺跡出土の晩期の土器はほとんどが二次加熱を受けている場合が多い。

第VI群土器（図15-90～95）

平安時代の土器である。隈無(4)遺跡では平安時代の遺構がほとんどであり、調査区西側にある沢の対岸には平安時代の竪穴住居が1軒検出されているにもかかわらず、この時期の遺物は非常に少ない。土師器は頸部片・底部片ともロクロを用いて成形している。須恵器は、外面とも黒光りして、器壁が非常に薄いが、断面の色調が赤褐色を呈することから、本遺跡に近い前田野目窯（五所川原市）から供給された製品である可能性が高い。

（坂本 真弓）

縄文時代早期の土器について

今回第I群第1類として分類した土器は、出土地点は調査区の西側に深さ3m程度の沢筋があり土器は沢の落ち際から10m離れた箇所から発見された。出土層位は基本層序の第III層である。垂直に突き刺さった状態で発見された土器もあり、また、今回（図11）に示した土器以外で同時期のものと判断される土器片がその近辺から出土している。この時期の遺構・遺物とも周辺には見あたらず、出土地点付近は当時のキャンプサイト的な使われ方をした場であったと思われる。

（坂本 真弓）

出土状況

1個体分（図11-1 a, b, c, d）の破片が、M-298-8グリッド第Ⅲ層からまとまって出土した。M-298-8グリッドの第Ⅲ層は、直下層である第Ⅳ層（ローム）のやや産んだ部分に堆積（約20cm前後）しているものである。炭化物などの混入物は一切含まず、広範囲に広がる他地点の第Ⅲ層と特に変化は認められない。

第Ⅱ層から出土したものも若干みられる（ドット図10-2の上位2点、出土状況の微細図面の枠外のもの、M-298-3, 11, 11, 12, M-299-12グリッド）。ただし、第Ⅱ層から出土したものはプライマリーな出土状態を示すものでなく、縄文後期の土器などと混在して出土した。

数点の破片を第Ⅲ層上面において確認した段階で、入念に周辺の土色観察を行ったが、掘り込みと推定されるようなプランや遺構堆積土と考えられる土壤等は一切確認されなかった。

土器は、6帯の接合によって構成されているが、その粘土帯ごとに破片を分類し、6種のマークでドットを落とすと図10-2のようになる。平面分布図からこれといった特徴は認められないが、垂直分布図からは、明らかに口縁部が上位、胴部が中位より出土する傾向が伺え、底部（尖底部）は最下レベルから出土している。この状況より、土器は尖底部をやや下方にして横転したような状況で存在したものかと想像されるが、尖底部は、外面が上方を向いて出土しているため、断定できない。

もう1個体（図11-2）は、H-304-2, 5, 6, 7グリッドI～II層から4片（a, b, c, d）出土している。器厚より、別個体であることは確実である。これらは全て第Ⅱ層からの出土であり、プライマリーな出土状態ではない。

（木村 高）

状 態

口縁部から尖底部まで残存しているが、上半と下半は接合しなかった。口縁部残存率は36%である。全体的に磨滅は少なかった。

器 形

尖底深鉢形である。尖底部の開き角度は約75度であり、体部中央まで角度を保つ。上半はほぼ直線的に立ち上がるが、接合帯1辺りから緩やかに内湾する。口唇部は面取りしており、僅かに内面側に傾く。

法 量

口径14.4cm、器高18.5cm（推定）を測る。

成 形

《接合帯幅》接合帯1（口縁部）35mm、接合帯2（一部文様帯）50mm、接合帯3（体部）17mm、接合帯4（体部）35mm、接合帯5（底部付近）50mm、接合帯6（底部）27mmを測る。

《器厚》接合帯1（口縁部）6～7mm、接合帯2（一部文様帯）7～9mm、接合帯3（体部）9mm、接合帯4（体部）9mm、接合帯5（底部付近）9～11mm、接合帯6（底部）12mmを測る。

《成形技法》粘土帯を積み上げて接合する。

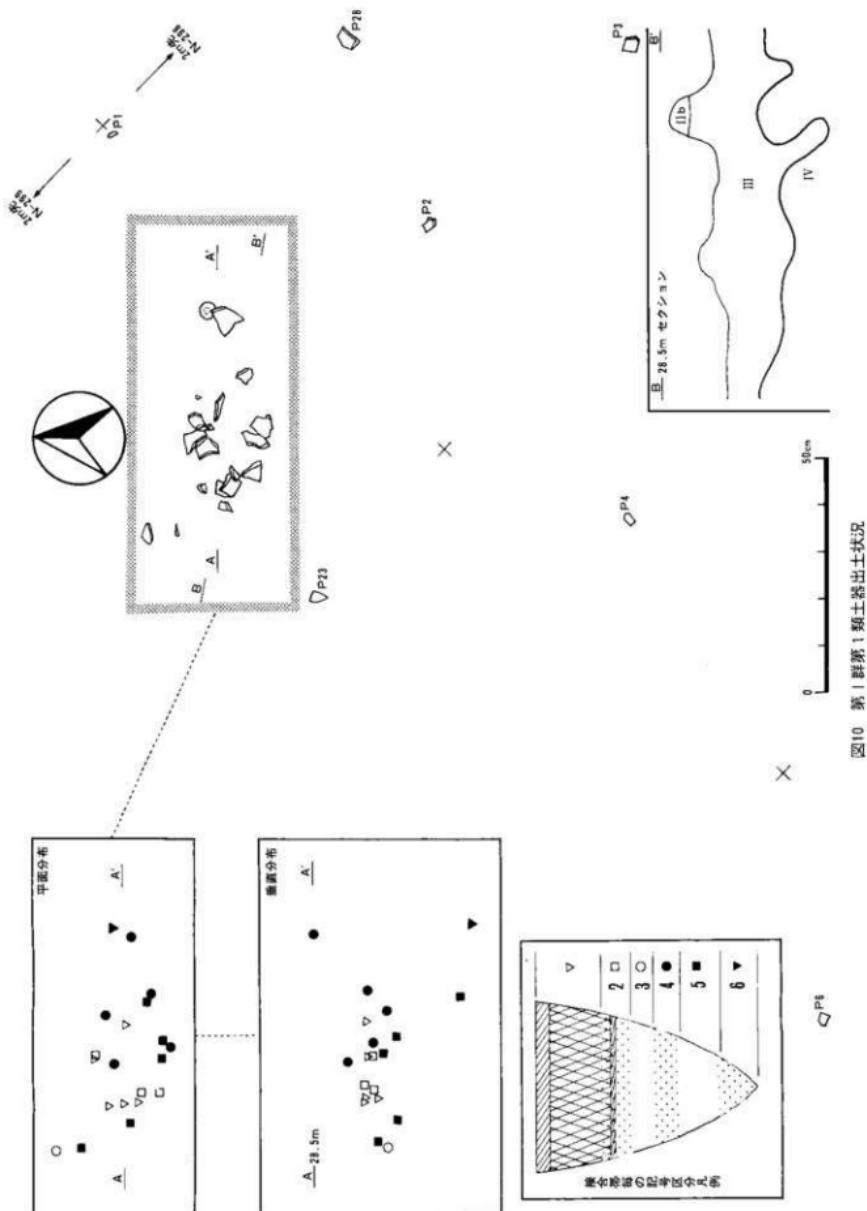
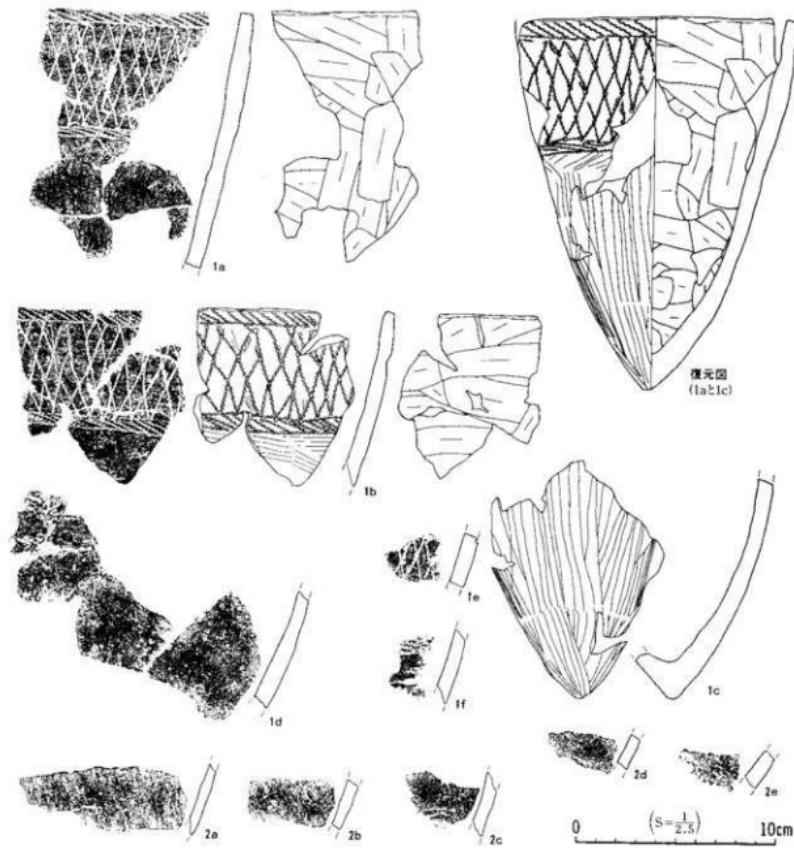


図10 第1群第1坑第1層土器出土状況



早期土器觀察表

番号	グリッド	層位	種類	留め	断面	表面	色調(外観)	色調(PH)	地土	裏文	外観調整・外観文様	内面調整	導線	整理番号		
1-a	M 286	8	Ⅲ	I	1	実底深鉢	口縁～底	7.SYR6/E	スヌ	10VR1/L	スヌ	砂・黒母・長石・ 漂石	口唇部直取り・(口縁文律跡) ヘラナデ(底) →又削下 妻(江戸型) →貝殻模様(底)	ヘラナデ	骨 S 1	
1-b	M 286	8	Ⅲ	I	1	実底深鉢	口縁～底	10VR5/E	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	口唇部直取り・(口縁文律跡) ヘラナデ(底) →又削下 妻(江戸型) →貝殻模様(底)	ナデ	骨 S 2	
1-c	M 286	8	Ⅲ b	I	1	実底深鉢	体～底断	7.SYR6/S	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	砂・黒母・長石・ 漂石	新文、刃方半	ナデ	骨 S 10
1-d	M 286	8	I	I	1	実底深鉢	体	7.SYR6/S	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	砂・黒母・長石・ 漂石	新文、刃方半	ナデ	骨 S 11
1-e	M 286	12	I	I	1	実底深鉢	体	7.SYR7/B	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	口唇部直取り・円形斜削	ナデ	骨 S 12	
1-f	M 286	3	Ⅲ	I	1	実底深鉢	体	7.SYR7/B	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	口唇部直取り・圓形斜削	ナデ	骨 S 14	
2-a	H 304	2	I	I	1	実底深鉢	体	7.SYR7/B	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	口唇部直取り	ナデ	骨 S 15	
2-b	H 304	7	II	I	1	実底深鉢	体	7.SYR7/B	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	砂・黒母・長石・ 漂石	新文、刃方半	ナデ	骨 S 16
2-c	H 304	5	II	I	1	実底深鉢	体	7.SYR7/B	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	砂・黒母・長石・ 漂石	新文	ナデ	骨 S 11
2-d	H 304	8	II a	I	1	実底深鉢	体	7.SYR7/B	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	砂・黒母・長石・ 漂石	新文	ナデ	骨 S 12
2-e	H 304	2	I	I	1	実底深鉢	底唇部	7.SYR7/B	-	10VR1/L	-	砂・黒母・長石・ 漂石	砂・黒母・長石・ 漂石	新文	ナデ	骨 S 15

図11 土器1

《調整》外面調整は、器面全体に横ナデが認められる。底部先端は横ナデ後、新たに粘土を重ね付けている。ナデの後に文様を施し、文様帯以外の部分（体～底部）に縦方向のミガキを入れている。ミガキは底部から口縁部に向かって行われている。内面調整は15mm前後の単位でナデが認められる。ナデの方向は不明なものが多いものの、ナデの状態から、接合帶1～3（口縁～体部）まで横ナデを中心で、接合帶4～6は斜め・縦方向のナデが多い。ナデの原体は不明である。

文 様

《沈線》文様としての沈線ではない。ここでは下書きとしての沈線を指す。貝殻腹縁圧痕文の下に施文されているため、全体の分かるもののが少ない。先端が0.1mm程の棒状工具を使用して、斜格子文様帯部分を直線で描いている。文様帯の上下にある平行文及び斜位文には沈線が確認出来なかった。

《貝殻腹縁圧痕文》斜行文様・平行文様・斜格子文様を貝殻腹縁圧痕で表している。斜行文様の施文単位は13～18mmでこれは斜格子文様の一辺の長さに匹敵する。斜格子文様の場合、口縁から体部に向かって右傾した直線を押圧し、続いて左傾した直線に施文する。

《刺突》貝殻腹縁圧痕文が交差する点に円形刺突が1つ施される。また、一部ではあるが斜格子文様と斜行文様の区画になっている平行文との交差箇所にも円形刺突が施される。円形刺突は先の尖った棒状工具を使用して約2mmの深さをついている。

《施工順序》器面全体の横ナデ→文様帯施文（沈線→貝殻腹縁圧痕→円形刺突）→無文帯ミガキ

胎 土

砂・雲母・長石が混入しているが、割合としては微量である。また、黄褐色浮石の割合が本遺跡出土土器に比べて多い（肉眼観察）。胎土中には海綿骨針が含まれる。

付着物

内面下半～上半にかけて炭化物の付着が見られる。

焼 成

堅緻で、色調は体部上半が純い褐色、下半が純い赤褐色、内面が純い黄橙色である。

（坂本 真弓）

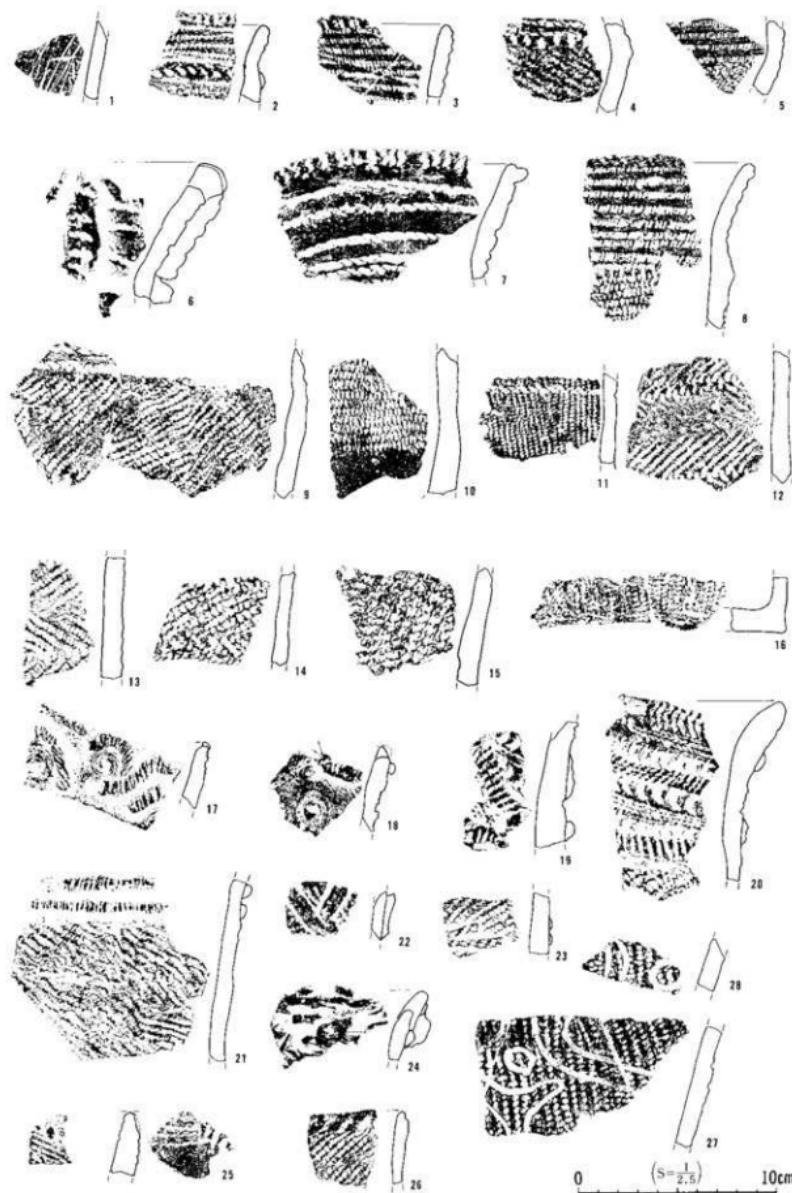


図12 土器2

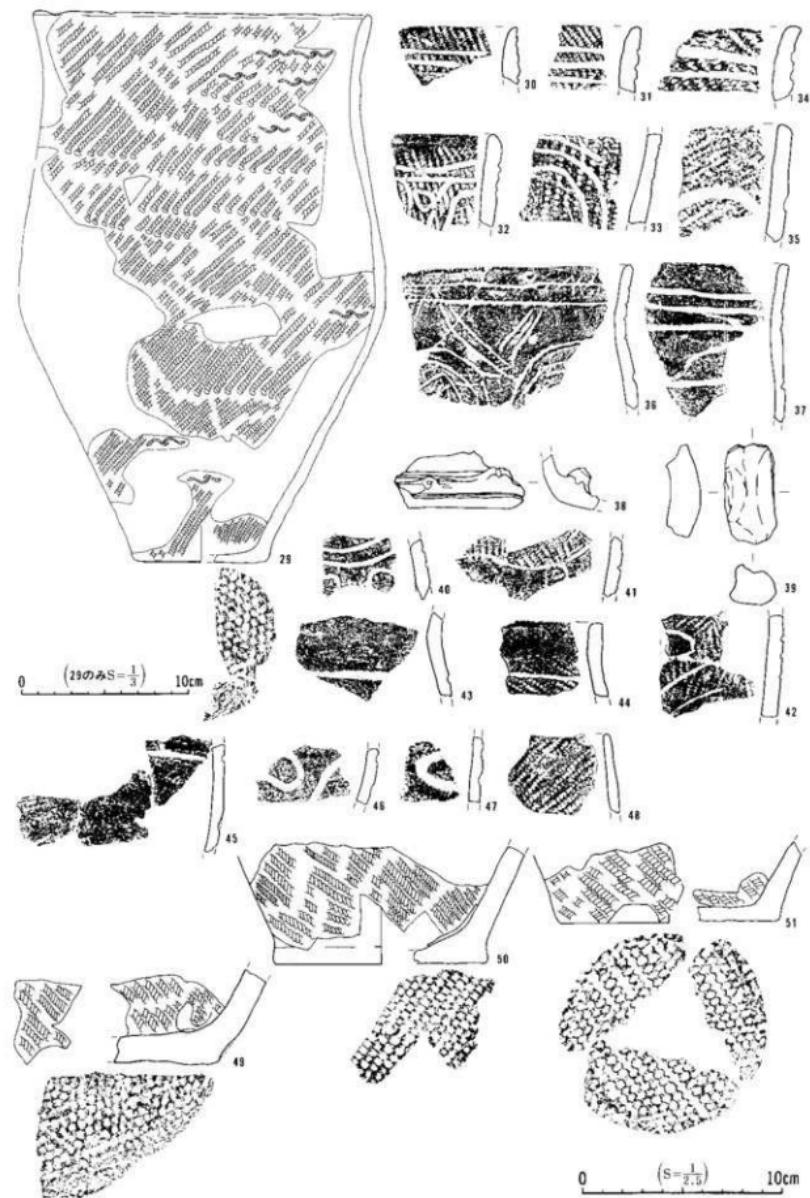


図13 土器3

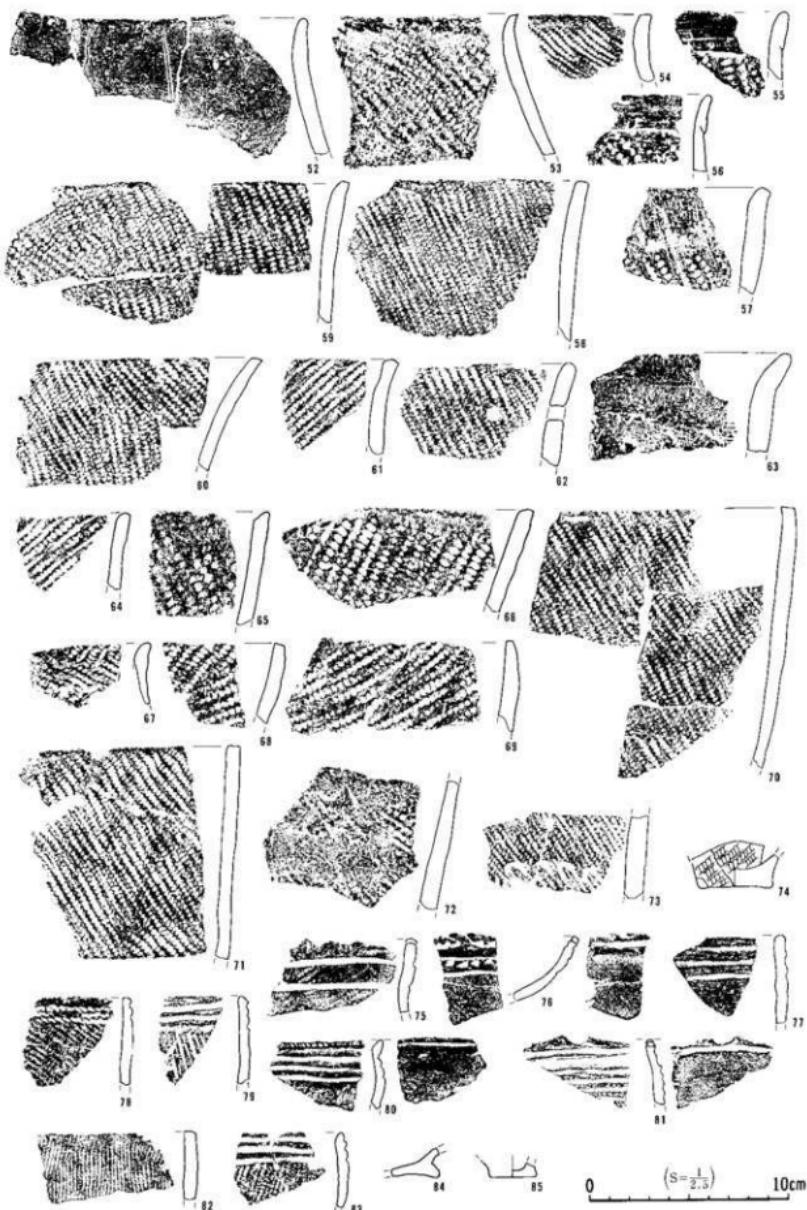
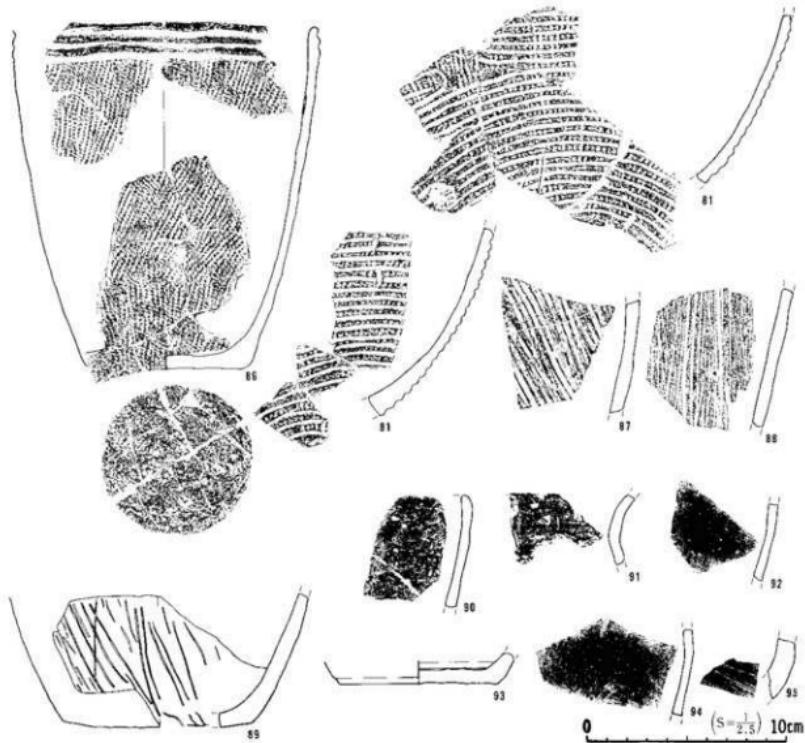


圖14 土器4



土器觀察表

番号	グリッド	層位	形	器種	柄付	色調(外側)	断土	地文	外観調査・外観文様	内面調査	褐色骨粉	備考	登録番号	
1	K 298	12	II	I	1	深鉢	縦	10YR12/7	—	—	—	—	75	
2	J 298	11	II	II	1	深鉢	口縁一様	10YR5/3	砂・植物織維	無輪柄縦條	—	—	40	
3	O 295	2	I	II	1	深鉢	口縁	10YR4/1	砂・蛋白・植物織維	多輪柄突起	—	—	15	
4	K 299	11	II	II	1	深鉢	口縁一様	10YR5/3	砂・植物織維	R.L輪文埴地	—	—	17	
5	M 294	12	II	II	1	深鉢	口縁一様	10YR4/1	砂・蛋白・植物織維	R.L輪文埴地	—	—	67	
6	N 294	6	II	II	1	深鉢	口縁	10YR5/1	砂・蛋白・植物織維	—	—	—	25	
7	N 294	4	II	II	1	深鉢	口縁	10YR5/1	砂・蛋白・植物織維	—	口縫部に然生状(左 R), 断面に突起, 補助輪の外側に然生状(右 R)。	合	7と同一個体	25
8	F 274	10	II	II	1	深鉢	口縁一様	10YR7/4	砂・蛋白・植物織維	—	—	—	24	
9	N 294	9	II	II	1	深鉢	口縁一様	10YR5/1	砂・蛋白・植物織維	無輪柄縦條	—	—	51	
10	F 274	15	II	II	1	深鉢	口縁一様	10YR7/3	砂・蛋白・植物織維	R.L輪文埴地	—	—	23	
11	L 295	14	II	II	2	深鉢	口縁一様	10YR5/3	砂・植物織維	R.L輪文埴地	—	—	5	
12	J 274	15	II	II	2	深鉢	縫	10YR5/6	砂	R.L輪文埴地	—	—	11	
13	調査区域	—	—	—	2	深鉢	口縁	10YR5/1	砂・蛋白	—	—	—	237	
14	K 296	13	II	II	2	深鉢	縫	7.5YR5/2	砂・蛋白・植物織維	—	—	—	105	
15	N 285	8	II	II	2	深鉢	縫	10YR5/4	砂・植物織維	R.L輪文埴地	斜方に施文	—	69	
16	M 276	13	II	II	2	深鉢	縫	7.5YR5/5	砂・植物織維	基盤	—	—	195	
17	N 300	13	風D	II	1	深鉢	口縁	10YR5/4.2.5.5	砂・蛋白・植物織維	—	断続的口縫, 口縫部に然生状(左 R 2本・右 R 1本), 口縫部に輪文(左 R 2本・右 R 1本)。	合	—	12
18	N 299	6	II	II	1	深鉢	口縁	10YR5/3	砂・蛋白	—	—	—	14	
19	J 285	10	I	II	2	深鉢	口縁一様	2.5YR6/8	砂・蛋白・植物織維	—	—	—	18	
20	I 285	17	I	II	2	深鉢	口縁	10YR1/4	砂・蛋白・蛋白	R.L輪文埴地	—	—	21	
21	M 302	16	風D	II	2	深鉢	口縫一様	10YR5/1.2.5.5	砂・植物織維	—	(R.L輪文) 基盤	斜方に施文	—	10

図15 土器5

番号	グリッド	標位	鉛	銅	錫	鉛錫	銅錫	色調(外観)	鉱土	地文	内面調整	外面調整	編号	整理番号		
22	L	205.14	I	■	3	■	7	鉛	IVYR8/3	青母-鉛錫	白L.純文地紋	鉛錫地紋	ナダ	26		
23	K	285.11	I	■	3	■	10	鉛	IVYR7/4.スヌ	45	白L.純文地紋	鉛錫地紋に凹面地紋をもつ粘土貼付。粘土貼上部から周囲は粗粒粘土風。	横ナダ	80		
24	L	285.4	魔F	■	3	■	10	鉛錫	IVYR7/4	45-鉛石	-	口剥口。口部は粗粒土上部にモルタル状充填。	横ナダ	171		
25	H	278.2	I	■	4	■	4	鉛錫	IVYR7/8	砂	白L.純文地紋	口剥削痕(三角形)の一部。口剥削痕が左側。地文無く一粒の粘土粒。	横ナダ	240		
26	J	290.2	II	■	4	■	4	鉛錫	IVYR7/3	45-青母-鉛石	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削の下には乾燥し、斜行の凹面地紋。(△)を示す。	横ナダ	179		
27	N	284.13	魔A	■	1	■	10	鉛錫	IVYR8/4	45	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋と、内部文。	ナダ	50		
28	M	295.14	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/4	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	三方ナ	17		
29	L	295.5	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/3.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。(△)を示す。	横ナダ	同一個体多部	F1	
30	M	295.15	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/3	45-青母-鉛錫	白L.純文地紋	口剥削痕(△)と△(△)を示す。	ナダ	34		
31	G	297.6	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/3	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕(△)と△(△)を示す。	横ナダ	219		
32	L	295.16	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/3	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕(△)と△(△)を示す。	横ナダ	13		
33	K	298.16	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/4.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕(△)と△(△)を示す。	ナダ	56		
34	N	293.3	魔E	IV	1	■	4	鉛錫	IVYR8/4	砂	白L.純文地紋	口剥削痕。地文無く一粒の粘土粒。	横ナダ	66		
35	K	295.6	I	■	1	■	1	鉛錫	IVYR8/3	45-青母-青石	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。地文無く一粒の粘土粒。	横ナダ	34		
36	H	304.6	■	8	■	2	■	2	鉛錫	IVYR7/3	45-青母	-	(△)減字。地文無く、構造地盤(△)を示す。	△ナダ	同一個体多部	A2
37	L	274.2	I	■	2	■	2	鉛錫	IVYR8/4	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。(△)を示す。	ナダ	22		
38	F	275.11	I	■	2	■	2	鉛錫	IVYR8/4	45-青母-鉛錫	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。(△)を示す。	ナダ	238		
39	L	295.2	II	■	2	■	2	鉛錫	IVYR8/4	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。(△)を示す。	ナダ	62		
40	M	295.15	II	■	2	■	2	鉛錫	IVYR8/4	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。(△)を示す。	ナダ	29		
41	H	274.6	I	■	2	■	2	鉛錫	IVYR8/4	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。(△)を示す。	ナダ	64		
42	M	295.15	II	■	2	■	2	鉛錫	IVYR8/3.2	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。(△)を示す。	横ナダ	214		
43	F	305.8	I	■	3	■	3	鉛錫	IVYR8/2	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。平行凹面地紋。	横ナダ	187		
44	D	297.12	I	■	3	■	3	鉛錫	IVYR8/3	砂	白L.純文地紋	口剥削痕。平行凹面地紋。	△ナダ	63		
45	O	297.11	I	■	3	■	3	鉛錫	IVYR8/3.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。平行凹面地紋。(△)を示す。	ナダ	62		
46	L	295.16	II	■	3	■	3	鉛錫	IVYR8/3	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。平行凹面地紋。(△)を示す。	ナダ	170		
47	N	294.11	II	■	4	■	4	鉛錫	IVYR7/4.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	(△)減字。地文無くアーチマーク(△)を示す。	横ナダ	46		
48	M	295.16	II	■	4	■	4	鉛錫	IVYR8/3	45-青母	白L.純文地紋	(△)減字。地文無くアーチマーク(△)を示す。	横ナダ	48		
49	J	295.7	II	■	4	■	4	鉛錫	IVYR7/4	45-青母	白L.純文地紋	(△)減字。地文無くアーチマーク(△)を示す。	横ナダ	45		
50	M	295.16	II	■	4	■	4	鉛錫	IVYR8/3	45-青母	白L.純文地紋	(△)減字。地文無くアーチマーク(△)を示す。	横ナダ	44		
51	L	295.7	II	■	4	■	4	鉛錫	IVYR7/4	45-青母	白L.純文地紋	(△)減字。地文無くアーチマーク(△)を示す。	横ナダ	45		
52	M	295.16	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/3	45-青母-鉛錫	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	36		
53	I	297.17	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/3.2	45-青母-青石	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	1		
54	M	295.7	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青母-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	100		
55	L	298.14	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/1	砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	8		
56	L	295.16	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/3	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	172		
57	M	295.8	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	88		
58	L	298.7	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	212		
59	J	298.7	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2.スヌ	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	3		
60	D	298.14	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/4	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	224		
61	L	295.13	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	93		
62	I	299.13	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	61		
63	K	297.14	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/4	砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	79		
64	L	295.8	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	34		
65	L	295.12	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	47		
66	L	295.15	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂-青石	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	4		
67	E	295.13	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2.スヌ	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	225		
68	I	297.13	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	36		
69	L	294.4	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/3	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	82		
70	J	296.10	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/4.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	206		
71	I	295.15	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	2		
72	O	295.15	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2.スヌ	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	57		
73	L	295.7	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	194		
74	K	295.7	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	28		
75	H	303.14	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2.3.2.4	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	12		
76	H	303.14	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2.3.2.4.45-青母	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	118		
77	L	299.10	II	■	5	■	5	鉛錫	7.SVR8/1	砂	不規	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	31		
78	N	276.2	II	■	5	■	5	鉛錫	44-口剥-1	IVYR7/2	青母-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	244	
79	K	290.8	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/4	砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	18		
80	K	298.18	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/4.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	横ナダ	33		
81	G	295.8	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/4.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	同一個体多部	E1	
82	G	298.14	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	同一個体多部	F2	
83	G	298.14	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	22		
84	K	295.12	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2	青石-砂	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	23		
85	M	295.2	魔F	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	-	二	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	ナダ	246		
86	G	295.12	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	b		
87	L	282.11	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	73		
88	L	295.16	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/2	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	17		
89	L	295.9	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2.スヌ	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	0.1		
90	L	292.5	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/2	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	233		
91	L	299.16	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/1	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	243		
92	L	273.2	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/1	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	234		
93	G	205.15	I	■	5	■	5	鉛錫	IVYR8/6	45-青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	234		
94	K	273.11	I	■	5	■	5	鉛錫	2.SV5/1	青母	白L.純文地紋	口剥削痕。口剥削部で凹面地紋。	△ナダ	242		
95	J	201.12	II	■	5	■	5	鉛錫	IVYR7/3	-	-	□クロ(成形)口剥削痕。	△ナダ	244		

垂直分布

第I層・第II層・第IIa層から多く出土している。第III層からは縄文時代早期の土器がまとまった状態で出土している。早期土器以外で層位的な出土状況は認められない。I・II・IIa層とも縄文時代から現代まで時期に幅のある遺物が混在して出土した。例を挙げると、第I層から縄文時代早期の土器片と近世の陶磁器がほぼ同レベルで出土する。

水平分布(図16)

273ライン以東は遺物の量が非常に少なかつた。溝跡で区画されている南西方向では比較的遺物の密集している。しかし、前述したように、層位的に安定した出土状況が見られないことから遺構の時代を特定する決め手とはならなかつた。他遺構についても同様で遺物の密集と各遺構との関係はほとんどない。273ライン以西から徐々に遺物が密集し始め、調査区西側(Q297~G306)沢の手前で最も多く出土する。この沢につながる緩やかな傾斜地には風倒木痕が多く、この落ち込み中に遺物が多く出土した。

(坂本 真弓)

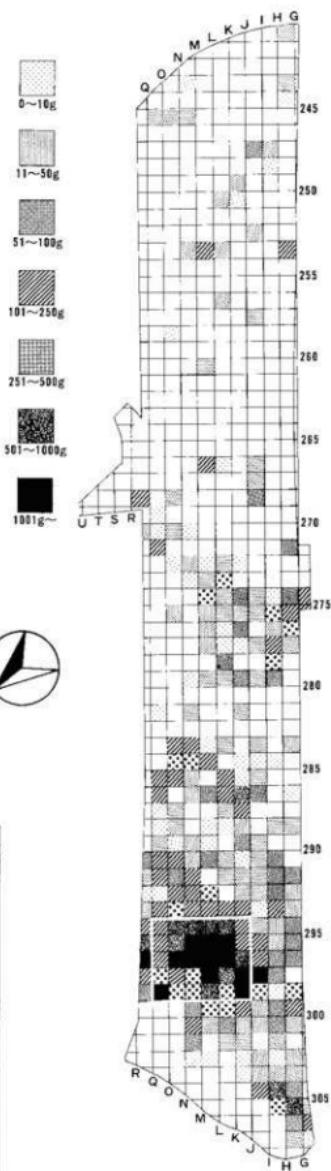
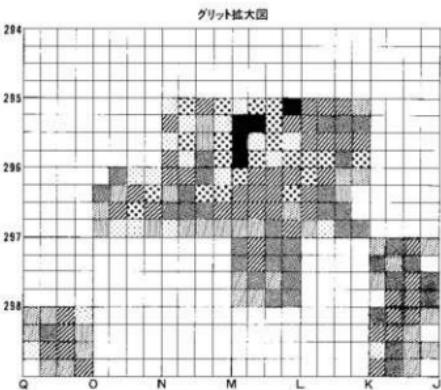


図16 土器重量分布図

2 土製品 (図17-1~5) 5点出土した。分類は、下記のように行った。

第I群土製品：ミニチュア土器状 第II群土製品：スプーン形 第III群土製品：土偶

第IV群土製品：土器片利用製品 第V群土製品：L字状

ミニチュア土器状(1)縄文早期の土器の尖底部状を呈し、 $1.5 \times 2.5\text{mm}$ 大の長方形刺突を外面に巡らす。口縁部状の部分がやや欠損し、粗い砂粒を多く混入する。

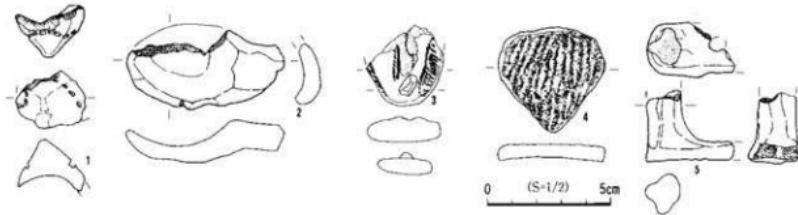
スプーン形(2)手づくね成形で、浅い指頭痕が観察される。柄状部の末端は非常に粗雑に作られる。

土偶(3)板状土偶の脚部と思われる。中央に垂下する隆帯は剥落しているが、 $7 \times 5\text{mm}$ 大の粘土瘤が残存している。縄文は無節R原体の側面圧痕と観察される。裏面は無文で、ミガキが施される。

土器片利用製品(4)土器片の割れ口を平坦に加工している。縄文は不鮮明だが、単節R Lと観察される。

L字状(5)L字を呈し、人の足に類似する。二か所欠損している。円形の穿孔は焼成前のものである。

(木村 高)



土製品観察・計測表

No.	出土位置	番 号	形状・名称	時 期	計 測 値			特 徴	分類	整理
					高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)			
1	K-297-11	II	ミニチュア土器状	未 明	26.0	22.0	15.0	縄文片倒刺、粗い砂粒混入	I	-
2	G-308-6	I	スプーン形	縄文後 期	63.0	53.0	12.0	底に無目縫、一部欠損	II	-
3	N-200-13	未標示D・無縫土	内側土壁上端瓦刀形	未 明	32.0	32.0	10.5	縄文瓦刀形(?)、無目縫、縄文片倒刺	III	-
4	M-205-1	未標示F・無縫土	土器片利用製品	縄文後 期	43.0	43.0	5.0	縄文片倒刺、無目縫、縄文中央近い破片倒刺無	IV	-
5	K-291-13	I	L字状	平 安 期	50.0	50.0	22.0	粗土、焼成青灰	V	-

図17 土製品

3 石器・石製品 (図18-1~18) 石器は17点、石製品は1点出土した。分類は、下記のように概区分した。

第I群石器：石 鐸 第1類：有茎 第2類：柳葉型

第II群石器：スクレイパー 第1類：ノッチを有すいわゆる石匙→a：縦型、b：横型

第III群石器：磨製石斧 第IV群石器：凹石

第V群石器：剥片 第VI群石器（石製品）：石棒

石鑓 (1~7) 7点出土した。3~6は有茎、1, 2, 7は柳葉型。1, 2には主要剥離面が残存する。

3と6の基部には、タール状物質の付着が認められる。アスファルトかどうかは断定できない。

スクレイパー (8, 11, 12) 3点出土した。全ていわゆる石匙である。11, 12は縦型（a）で、8は横型（b）である。全て主要剥離面を残す。

磨製石斧 (9, 13) 2点出土した。2点とも擦切技法で製作されたものと思われる。

凹石 (18) 自然礫の両広面を敲打しており、手を持って振ると良くなじむ。

剥片 (10, 15~17) 実用品とは考え難いものであるが、人為的な打撃による剥離が認められる。整形や刃部作出のための調整剥離等は一切認められない。10は黒曜石製で、Uフレイクの可能性あり。

石棒 (14) 中央部付近の破片と思われる。1点のみの出土。

(木村 高)



石器・石製品観察・計測表

番号	出土位置	質	種類	石質	計測値				特徴	分類	参考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
1	K-265-4	II	石 破片	石質 岩	26.0	11.0	3.0	0.8	断面形	I-2	01
2	M-275-9	II	石 破片	石質 岩	30.5	11.5	3.5	1.0	断面形	I-2	03
3	J-302-1	I	石 破片	石質 岩	22.5	8.5	4.5	0.8	有茎 タール状物質付着	I-1	05
4	N-245-10	II	石 破片	石質 岩	26.0	11.5	5.0	0.9	有茎	I-1	04
5	M-270-1	II	石 破片	石質 岩	25.5	15.0	4.0	0.9	有茎 茎状欠損	I-1	06
6	L-250-10	II	石 破片	石質 岩	35.0	18.5	4.5	2.4	有茎 片状欠損 タール状物質付着	I-1	11
7	O-287-7	II	石 破片	石質 岩	48.0	17.0	4.0	2.3	断面形	I-2	22
8	N-267-9	II	スクレッパー	石質 岩	30.5	48.5	8.0	11.7	いわゆる刃形 絶型	II-1-b	08
9	N-281-14	II	堅壁石	砂岩地質の堅壁岩	29.0	23.0	7.5	4.7	丸頭のみ残存	III	12
10	H-301-8	II	刮	片 岩	28.0	11.0	10.5	3.2	自然剥離跡 リフレイクの可逆性あり	V	13
11	N-272-3	II	スクレッパー	石質 岩	68.0	33.5	7.0	13.7	いわゆる刃形 絶型	II-1-b	27
12	K-298-15	II	スクレッパー	石質 岩	60.0	32.0	18.0	21.1	いわゆる刃形 絶型 断面は円柱に近似	II-1-b	44
13	H-299-8	I	堅壁石	褐色地の堅壁岩	53.0	31.0	26.0	77.7	赤褐色の刃形 リフレイク	III	29
14	H-309-1	I	石 破片	石質 岩	102.0	22.0	10.5	33.6	赤褐色片	II	10
15	I-301-14	II	刮	片 岩	26.5	14.0	10.0	2.6	自然剥離跡	V	17
16	L-279-7	I	刮	片 岩	21.0	17.5	7.5	2.1	自然剥離跡	V	18
17	H-277-8	II	刮	片 岩	22.5	26.0	16.0	5.2	自然剥離跡	V	16
18	L-298-9	II	堅壁石	片 岩	107.0	71.0	31.0	258.0	敲打痕面×2枚	IV	15

図18 石器・石製品

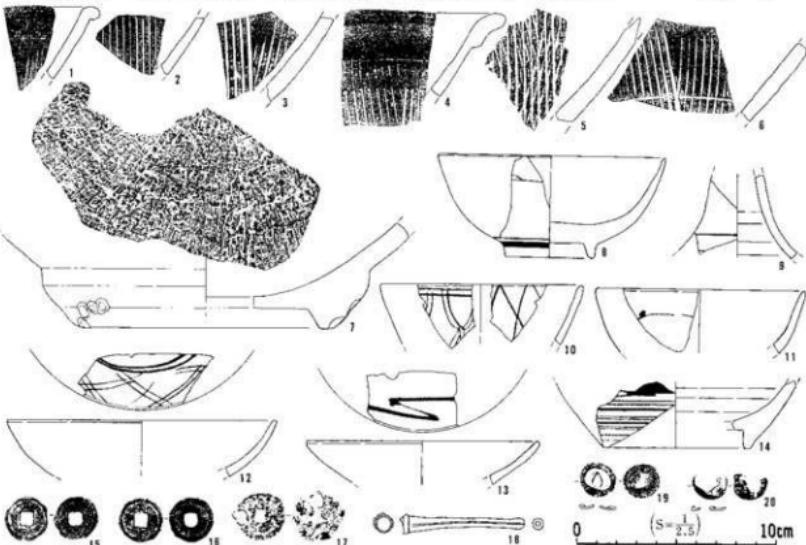
4 陶磁器 (図19-1~14) 近世～現代の遺物が出土した。ここでは近世と产地不明の資料のみを報告する。図示資料以外には、白化粧土による刷毛目を施した肥前IV期壺の胴部や、肥前陶器(IV期か)の底部、明治初頭の印判染付の皿等の細片が出土している。分類は、大橋編年を基に概区分した。

I群：肥前III～IV期 II群：肥前IV期

III群：产地時期不明→1類：陶器 2類：磁器→a：皿 b：碗 c：瓶 d：擂鉢

5 金属製品 (図19-15～20) 近世から現代のものが出土したが、近世～近代初頭と考えられるものだけを報告する。分類は、下記のように概区分した。

I群：錢貨→1類：寛永通寶 2類：近代硬貨 II群：雁首錢 III群：煙管 (木村 高)



陶磁器観察・計測表

No.	出土位置	層	形	内 容	計			特 徴	分 類	型 別
					口 径(cm)	底 径(cm)	厚 さ(cm)			
1	E-253-12	I	壺	口～IV	-	-	-	口縁下2cm以内表面剥離、下部裏地、内部剥落2箇	I-1 d	7.7
2	M-255-15	II	壺	口～IV	-	-	-	内部剥離、剥落2箇	I-1 d	7.6
3	G-256-14	I	壺	IV	-	-	-	内部剥離、剥落2箇	I-1 d	7.2
4	K-255-8	I	壺	IV (前半)	-	-	-	内部剥離、剥落1箇	I-1 d	7.3
5	I-253-10	I	壺	口か	-	-	-	内部剥離、剥落が口部に及ぶ	I-1 d	7.9
6	K-256-2	I	壺	IV	-	-	-	内部剥離、剥落1箇	I-1 d	7.5
7	I-306-26	Ⅱ	壺	口か	-	128.0	-	内部剥離、剥落口部に及ぶ、裏地外部剥離後、長時間使用と思われる。	I-1 d	7.1
8	M-256-14	II	壺	IV	116.6	44.0	51.8	内部剥離、剥落口部に及ぶ、裏地外部剥離後	I-2 b	2.5
9	J-307-1	I	壺	IV	-	-	-	内部剥離、剥落口部に及ぶ	I-2 c	7.7
10	M-252-11	I	壺	IV	104.6	-	-	外部剥離下二重剥離と二重裏地、内部一重裏地	I-2 b	2.8
11	M-256-16	I	壺	IV	105.6	-	-	内部剥離口か	I-2 b	2.3
12	I-256-3	I	壺	IV	106.6	-	-	内部空心み二重剥離、斜底子口	I-2 a	2.1
13	L-257-1	II	壺	IV	118.6	-	-	内部剥離、剥落見ально17世紀～18世紀	I-2 a	2.2
14	L-257-14	II	壺	口か	-	34.0	-	灰土上～白色粗土剥落剥離、裏地剥離、内部剥離、剥落口か	I-1 c	7.8

金属製品観察・計測表

No.	出土位置	層	形	内 容	計			特 徴	分 類	型 別	
					最 大 さ (mm)	幅 (mm)	厚 さ (mm)				
15	L-256-2	I	鏡	寶	23.0	22.5	1.4	2.8	鋸型 夏永通寶、新夏永、経済竹葉	I-1	4
16	M-257-1	I	鏡	寶	22.5	22.5	1.1	1.0	鋸型 夏永通寶、新夏永、経済竹葉	I-1	2
17	J-309-15	I	鏡	寶	26.0	24.0	2.1	2.4	鋸型 夏永通寶か、薄付裏面なし、利口不可	I-1	1
18	L-256-13	II	鏡	寶	63.0	8.0	0.8	6.0	鋸型 口口、小鹿角(1963)に該当なし	II	3
19	K-256-8	II	鏡	寶	19.5	18.5	1.6	2.0	鋸型 線彫	II	3
20	I-256-4	I	鏡	寶	19.0	-	3.1	1.1	鋸型 約半寸文次、経済竹葉	II	5
X	J-301-8	II	鏡	寶	21.0	27.0	1.3	6.1	因なし 新夏永、経済竹葉、明治18年銘鑄、角口	I-2 e	6

図19 陶磁器・金属製品

第V章 調査の成果

第1節 遺構について

遺構は総計5基検出され、調査面積の割には非常に少ない。この状況は遺跡の主体部が調査区域外の近隣地区にあることを暗示している。本遺跡よりみて北西に位置する隈無(2)遺跡（1998年報告予定）では、平安時代の堅穴住居跡1軒が検出されており、また南東に位置する隈無(1)・(6)遺跡（1998年報告予定）からは総計5軒の縄文時代中期の堅穴住居跡が検出されている。

本遺跡においても北西域に白頭山苦小牧火山灰（B-Tm）を堆積土中に含む土坑3基（第1～3号土坑）が検出され、南東域にはそれら3基の土坑とは全く異質の堆積土（黒色の度合いが強い）に覆われ、B-Tmを含まない土坑（第4号土坑）が1基検出されている。B-Tmを含む3基の土坑の構築時期は、ほぼ平安時代と認定して問題ないが、B-Tmを含まない第4号土坑の構築時期は不明である。ただし、第4号土坑の検出位置は隈無(1)・(6)遺跡の方位にあることから、構築時期は縄文時代の可能性がある。なお、第4号土坑の周辺に土器などの遺物は非常に希薄であった。

B-Tmを含む3基の土坑は、全て堆積土中に炭化材（物）を混入するものであり、特に第1号土坑の壁面は部分的に被熱していたことから、土坑内部において何かを燃焼させたものと想定できる。また、出土した炭化材は第1・2号土坑ともB-Tmを含む層中及び直下から出土しているので、B-Tm降下直前の燃焼行為であったものと考えられる。

町田洋・福沢仁之（1996）の両氏は、小川原湖底から得られた湖底堆積物のピストンコアを基に、B-Tmが十和田a火山灰（To-a）よりもほぼ8年分上層に堆積することを確認し、「扶桑略記」の中にあらわれる、915年に降下した火山灰^(註)をTo-aと考え、B-Tmの降下を923～924年の冬と推定した。当然、扶桑略記の年代が崩れると白頭山苦小牧火山灰の降下が923～924年ではなくなるが、あくまでもTo-aとB-Tmは8年の時間差しか有しないのはほぼ確実と言える。「扶桑略記」の記述を肯定的に捉えた場合、町田・福沢の提示したデータは、平安時代の遺構の構築・廃絶時期を推定する上で非常に有効なものとなる。本報告では、このデータを採用し、第1～2号土坑の構築～廃絶時期を10世紀前半頃として考えておきたい。また、1条検出された溝跡には、全く遺物が認められなかったことから時期不明と言わざるを得ないが、平面及び断面の形状から推察すると、第1～3号土坑と同様に平安時代の構築である可能性が高いと思われる。

（註）陸奥国分寺七重塔廃失時の施土層が灰白色火山灰を覆う事例と『日本紀略』の中の記事とを照應させ、火山灰の降下を934年以前として提える見解（白鳥1980）もある。

（木村 高）

第2節 遺物について

早期の土器について

第I群第1類とした土器は本遺跡で少なくとも2個体が確認されている。1つはH-298-8付近で出土した貝殻腹縁压痕文の施文されている土器であり、もう一つはH-304で散発的に出土した尖底深鉢胴部片と思われる無文の土器群である。沢の落ち際から10m程の距離であり、縄文時代早期にこの周辺で人間活動が行われていたと思われる。しかし、本類土器群は全て遺構外の資料である上に

2個体分という僅少な個体数から遺跡との関係を考察することも極めて難しいと言わざるを得ない。

編年の位置

東北地方北部における早期中葉の土器編年は諸案が提示されている。ここではその諸編年について触れないが、今まで設定された土器型式名を使用する方が土器をイメージし易いと考えられるため、便宜上本文中に記載する。

本類土器の特徴は①砲弾形の器形に見られる、文様帯と無文部との区画、②貝殻腹縁圧痕文を多用した文様構成、③圧痕文の交点に施した刺突文、④沈線文による下書き後に貝殻腹縁文施文、などが挙げられる。以下、各型式と本類土器の関係をまとめた。

①物見台式土器では器形と文様帯区画には密接な関係がある。土器外面の屈曲が文様帯区画となる場合が多い。本類土器は無文帯と文様帯が約3:1の割合で区画されている。底部からやや丸味を帯びた砲弾形をした器形だが、文様帯と無文帯の境界にはごく僅かな屈曲が見られる。この器形は鳴川遺跡^(註2)出土の土器に極めて類似している。このような器形の土器は、文様帯と無文帯の区画が明瞭な鳴川式、鳥木沢式、^(註3)中野A式a・c種に共通性を見いだせる。

②幾何学文様を多用した中野A式の文様構成の中に本類土器と類似した、貝殻腹縁文による斜格子文様を主文様とした例が見られる。但し、中野A式と同じ文様構成を持った例は見当たらない。^(註4)また、本県内でも同様である。^(註5)

③は中野A式、千歳式、住吉町下層式に共通した技法である。また、鳥木沢式や螢沢AⅡ式C類には本類土器とは異なる、貝殻腹縁圧痕文を充填するように刺突が施されている。

④中野A式に見られる。近年発掘調査された中野A遺跡出土の土器群は「沈線で文様を描くものでは貝殻腹縁圧痕文で縁取りするものも多いが、貝殻腹縁圧痕文が省略されるものもある。(中略) 沈線文のみの場合もある。」(北海道埋蔵文化財センター 1991)^(註6)という記述から、貝殻腹縁文の省略化傾向が伺える。また、鳥木沢遺跡出土の繩文時代早期貝殻文土器群の施文手法も、沈線文を施した後に貝殻腹縁文や刺突を施したり、沈線文と刺突のみで文様を付けるといった手法が取られている。施文技法の変遷としては貝殻腹縁圧痕文・沈線文併用期→沈線文のみ使用期の例が考えられる。しかし、文様要素の一つとしての沈線文と、下書きとしての沈線文には大きな違いがあるといわざるを得ない。本類土器は貝殻腹縁圧痕文が主体的であるから少なくとも、「沈線文のみ使用期」よりは前の段階に位置づけられる。

以上のようなことから考えると、器形、文様帯構成、施文方法を総合した時、中野A式との関係が極めて強い。しかし、鳴川式の例に見られるような文様帯比率・器形から、中野A式の中でもやや新しい部類に入ると思われる。また、器形、文様構成、胎土が、中野A式とは若干異なることから見て、中野A式の影響を強く受けた本県内で製作された土器と言えるだろう。

(註1) 本類を物見台式に比定されるものとしたが、この型式名称を「幾つかの特徴を共有する縄文時代早期中葉土器型式の集合」という捉え方で使用した。

(註2) 36ページ「引用・参考文献」参照

(註3) 八戸市教育委員会 1996 「鳥木沢遺跡」 八戸市埋蔵文化財調査報告書 第17集

(註4) 富永勝也氏の御教示による。

(註5) 喬尾正人氏の御教示による。

(註6) 註2参照

(坂本 真弓)

第VI章 自然科学的分析

第1節 火山灰の蛍光X線分析

奈良教育大学教授 三辻利一

1 はじめに

十和田a火山灰と白頭山火山灰は青森県下の平安時代の遺跡の地層に年代観を与える上で重要な指標になる。両火山灰が同一遺跡に堆積している場合には、白頭山火山灰が上位火山灰であるが、両火山灰が同一遺跡に必ず堆積しているとは限らない。一つの遺跡にいづれかの火山灰しか堆積していない場合、それが十和田a火山灰なのか、白頭山火山灰なのかを判断しなければならない。これまでのデータから、両火山灰はK, Ca, Rb, Srの4因子で容易に識別できることが分かっている。しかし、火山灰は遺跡の地層に堆積中に、周囲の土壤によって汚染される場合がある。また、堆積している火山灰が少量であるため、サンプリングの際、周囲の土壤も一緒に採取し、土壤に汚染された資料になっている場合もある。このような場合には、K, Ca, Rb, Sr, Fe因子はそれぞれ影響を受ける。周囲の土壤に汚染された試料が土壤試料かを見定める上にNa因子は役に立つ。

これらのこと考慮に入れて、限無(4)遺跡出土火山灰を蛍光X線分析によって同定した結果について報告する。

2 分析結果

分析値は表1にまとめてある。全分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で表示してある。

図1にK—Ca分布図を示す。この図にはこれまでに得られている多数の分析値を包含するようにして、白頭山領域と十和田a領域を示してある。定性的な領域ではあるが、これで両火山灰の同定は十分できる。図1から、今回分析した4点の試料はともに白頭山火山灰であることを示す。

図2にはRb—Sr分布図を示す。この図にも白頭山領域と十和田a領域を示してあるが、4点の試料はいづれも白頭山領域に分布することが分かる。

図3ではFe因子を比較してある。Fe因子でも4点の試料は白頭山火山灰によく対応している。

このように、K, Ca, Rb, Sr, Feの5因子すべてで、今回分析した4点の試料は白頭山火山灰によく対応した。このような場合、Na因子はほとんど風化・汚染がないことを示す。表1を見ると、4点の試料のNaの分析値はいづれも1以上の値を示しており、風化・汚染がないことを示す。

以上の結果、4点の試料はともに新鮮な試料であり、白頭山火山灰と判断される。

表1 分析データ

試料No.	分析No.	遺構	層位	K						判定結果
				Ca	Fe	Rb	Sr	Na		
No.1	8-4793	第1号土坑	覆土中位(4b, 5b, 6, 7a, 9, 10, 11, 12, 13層)	1.109	0.331	2.530	1.120	0.071	1.280	白頭山火山灰
No.2	4794	第2号土坑	覆土上位(確認面2, 3, 9層)	1.040	0.331	2.560	1.140	0.075	1.200	白頭山火山灰
No.3	4795	第3号土坑	覆土上位(確認面1, 2a, 2b, 2c, 2d層)	1.090	0.329	2.470	1.110	0.085	1.300	白頭山火山灰
No.4	4796	大型焼土	覆土上位(1, 2層)	1.139	0.369	2.560	0.991	0.072	1.280	白頭山火山灰

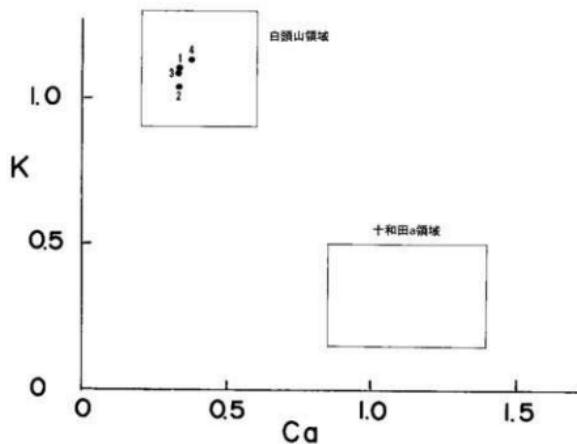


図20 K - Ca分布図

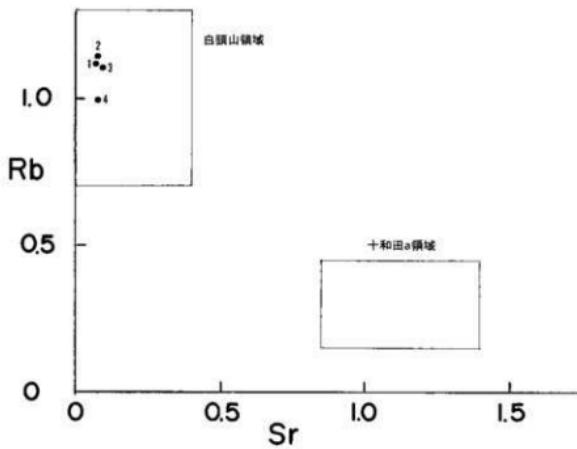


図21 Rb - Sr分布図

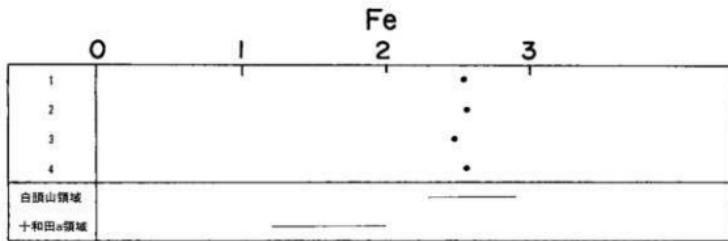


図22 Fe因子の対応

第2節 放射性炭素年代測定

学習院大学教授 木越 邦彦

受領致しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の β 線計数率と自然係数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B. P.)として表示してあります。また試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての係数率との差が 2σ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

記

<u>Code No</u>	<u>試料</u>	<u>年代 (1950年よりの年数)</u>
Gak - 19140	炭化材 charcoal from 青森県五所川原市隈無(4)遺跡	940 ± 80
	No 1 (第1号土坑覆土: B-Tm混合土層中)	A. D. 1010
Gak - 19141	炭化材 charcoal from 青森県五所川原市隈無(4)遺跡	1170 ± 90
	No 2 (第2号土坑覆土: B-Tm混合土層中)	A. D. 780

第VII章 調査のまとめ

本遺跡は、五所川原市の南部、十川の中流右岸から東に約1km離れた標高26~31mの平坦な丘陵上に位置する。調査の結果、調査区の全域には近年のリンゴ栽培に伴う擾乱が多数認められ、また地区によっては大規模な削平もなされていた。このことから、遺跡の遺存状態は良好と言えないものであったが、縄文時代早期から近代にかけての多種にわたる遺物及び、平安時代の遺構が検出された。

検出遺構 検出した遺構は平安時代のものが主体であり、総数5基である。

土坑—平安時代3基、時期不明1基。溝跡—時期不明1条。

4基検出された土坑のうち3基からは、白頭山苦小牧火山灰（B-Tm）が検出され、いずれも覆土中に炭化材（物）を混入するものである。特に、第1号土坑の壁面は部分的に被熱していたことから、土坑内部において何かを燃やしたと想定される。

出土遺物 出土した遺物は縄文時代のものが主体であり、総量は、段ボール箱で16ヶ分である。

縄文時代—早期、前期、中期、後期、晩期にわたる各期の土器と各種石器（石鏃、スクレイパー、凹石、磨製石斧）及びミニチュア土器、土器片利用製品、土偶、土製品、石棒が出土した。

平安時代—土師器、須恵器、土製品が出土した。

近世から近代初頭—陶磁器（肥前陶磁器）や寛永通寶、童一錢銅貨、雁首錢、煙管等が出土した。

出土遺物は、種類の面で見れば決して乏しい内容ではないが、土器の大半は細片であり、その出土状態も極めて不安定なものであった。しかし、唯一良好な状態で出土した縄文早期の貝殻文土器（図12-1）は、注目すべき資料である。

本遺跡から出土した貝殻文土器はその文様モチーフにおいて類例に乏しいものであり、また、浪岡町以北の津軽地方において、貝殻文土器の出土数は僅少である。加えて現在、五所川原市内から出土した考古学的資料の中では最古の遺物に属するものである。五所川原市域における考古学的資料は未だ不足している現状より、限無(4)遺跡は今後の調査・研究に貴重な資料を提供したと言えよう。

（調査担当者一同）

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1974 『今別町浜名遺跡・中宇田遺跡・西田遺跡・五郎兵衛山遺跡・五所川原市原子湖底遺跡発見調査報告書』
- 青森県埋蔵文化財調査報告書 第13集
- 青森県教育委員会 1976 『千歳遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第27集
- 青森県教育委員会 1993 『野軒遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第149集
- 五所川原市教育委員会 1974 『原子遺跡』 埋蔵文化財報告書 第2集
- 五所川原市 1993 『五所川原市史 資料編』1
- 五所川原市教育委員会 1984~90 『般音林遺跡』（第二次~第十次）埋蔵文化財報告書 第7~15集
- 八戸市教育委員会 1988 『田畠木平遺跡』 八戸市埋蔵文化財調査報告書 第20集
- 北海道埋蔵文化財センター 1991 『函館市中野八遺跡』 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第84集
- 大橋康二 1989 『肥前馬籠』 ニュー・サイエンス社
- 小泉 弘 1983 『江戸を鬻る』 柏書房
- 白鳥良一 1988 『多賀城跡出土土器の変遷』『研究紀要刊』宮城県多賀城跡調査研究所
- 高橋正勝 1967 『北海道七飯町鳴川遺跡の尖底貝殻文土器について』『石器時代』第8号 石器時代文化研究会
- 西川博孝 1989 『丁物見台』と「吹切尻」~東北・北海道南部における貝殻文土器未編年~『先史考古学研究』第2号 阿佐ヶ谷先史学研究会
- 半沢 紀 1996 『津軽平野』 第5号
- 町田 洋・福井仁之 1996 「潮底堆積物からみた10世紀白頭山大噴火の発生年代』『日本第四紀学会講演要旨集』26 日本第四紀学会
- 村越 雄 1974 単行本 『内陸土器文化』 雄山閣考古学選書10



遺跡周辺航空写真(昭和23年6月23日撮影) この写真は、本軍撮影の空中写真を建設省国土地理院の承認を得て、掲載したものである。



遺跡周辺航空写真(昭和50年10月17日撮影) この写真は、建設省国土地理院の承認を得て、掲載したものである。

写真1 遺跡周辺航空写真

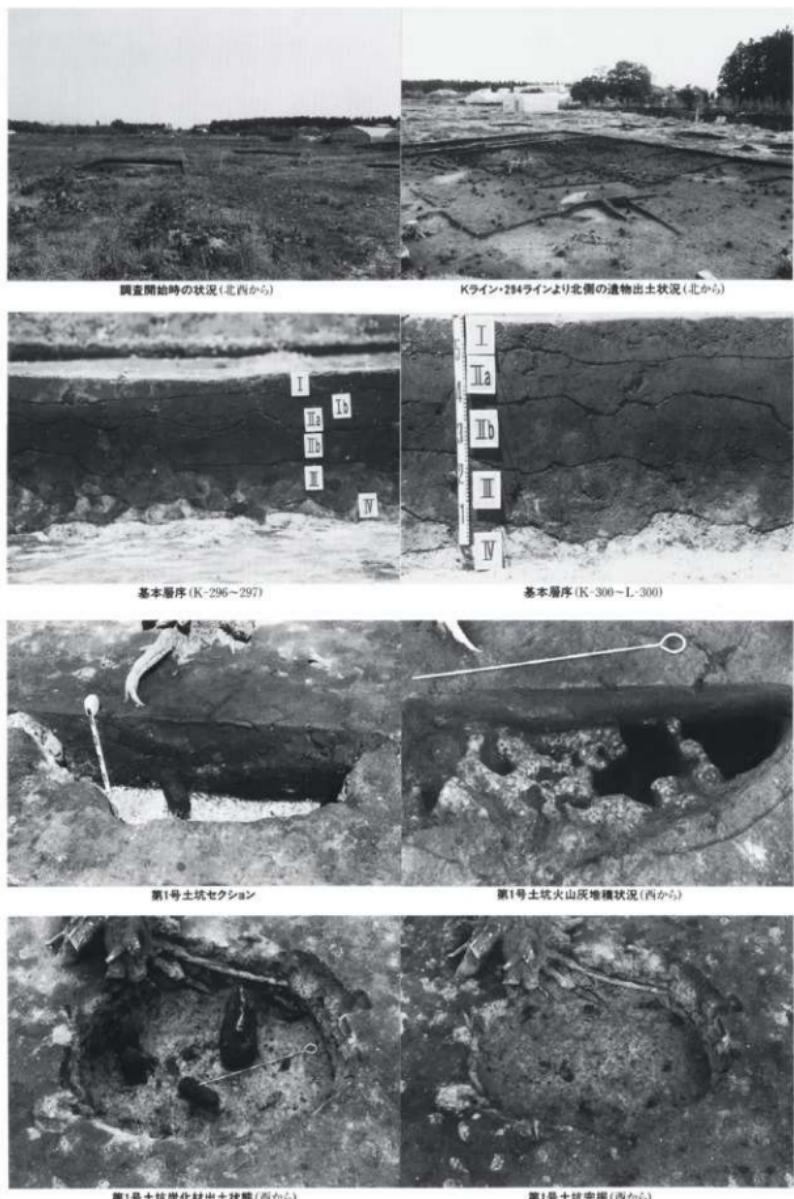
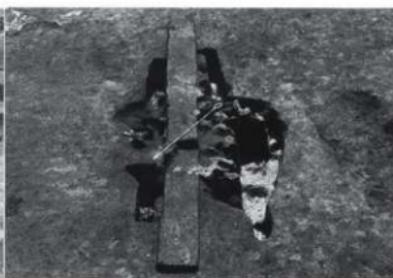


写真2 調査開始時状況・遺物出土状況・基本層序・第1号土坑



第2号土坑セクション



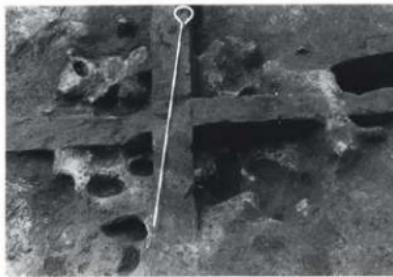
第2号土坑火山灰堆積状況(北西から)



第2号土坑完掘(北東から)



第3号土坑セクション



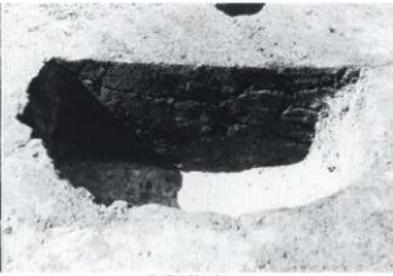
第3号土坑火山灰堆積状況(北から)



第3号土坑完掘



第4号土坑完掘



第4号土坑セクション

写真3 第2号土坑・第3号土坑・第4号土坑

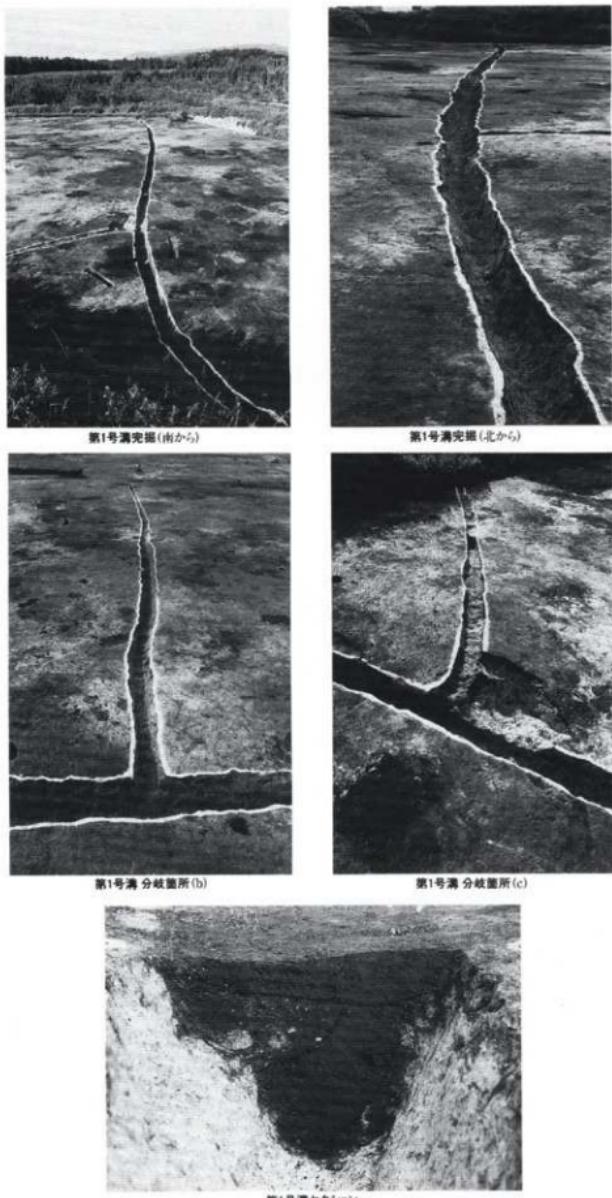
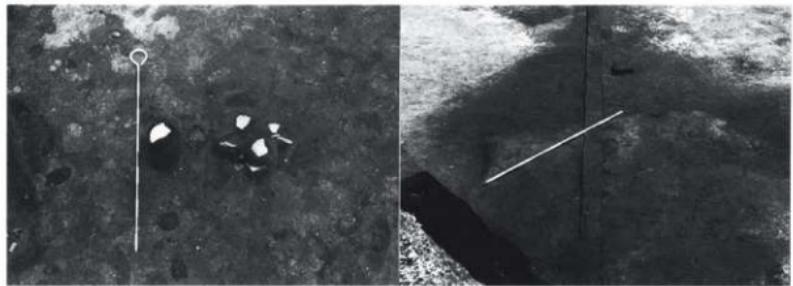


写真4 第1号溝跡



貝殻文土器出土状態

貝殻文土器出土状態



貝殻文土器出土状態

大型焼土(南から)

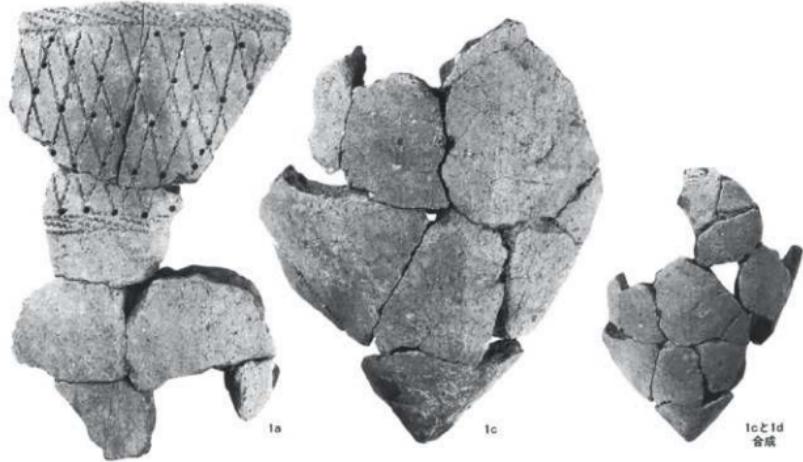


写真5 貝殻文土器出土状態・大型焼土・貝殻文土器



写真6 土器

(S=1/2)



写真7 土器

(S=1/2)



写真8 石器・石製品・陶磁器・金属製品

図示なし

報告書抄録

ふりがな	くまなし(4)いせきはっくつちょうさほうこくしょ						
書名	限無(4)遺跡発掘調査報告書						
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書						
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第209集						
編著者	木村 高 坂本 真弓						
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒038 青森市新城字天田内152番15 TEL 0177-88-5701 FAX 0177-88-5702						
発行機関	青森県教育委員会						
発行日	西暦1997年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
限無(4)遺跡 青森県五所川原市 大学羽野木茨学 限無55-33、界	205	05076	40度 45分 18秒	140度 31分 47秒	19950424~ 19951102	10,000	道 路：国道 101号浪岡五 所川原道路建 設事業に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
限無(4)遺跡	散布地	縄文	なし	縄文土器 各種石器 (石鏃・スクレッパー・ 磨製石斧・凹石等) 玉髓刮片 石棒 土製品 土偶 土器片利用製品	縄文早期の貝殻土器が出土。 黒曜石製の削片1点出土。 (分析未実施)		
	-	平安	土坑	3基	土師器 須恵器 土製品	白頭山苦小牧火山灰(B-Tm) 降下以前の土坑3基。	
	散布地	近世	なし	肥前陶磁器 煙管 錢貨 雁首銘	18世紀代主体。		
	散布地	近代	なし	陶磁器 錢貨			
	-	時期不明	土坑 溝跡	1基 1条			

青森県埋蔵文化財調査報告書 第209集

隈無(4)遺跡

国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う
遺跡発掘調査報告

発行年月日 1997年3月31日
発 行 青森県教育委員会
〒030 青森市新町二丁目3-1
編 集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038 青森市新城字天田内152番15
TEL (0177) 88-5701 FAX (0177) 88-5702
印 刷 所 ヨシダ印刷㈱ 青森営業所
〒030-01 青森市卸町7番3号
TEL 0177-28-4433
